

# 古史傳

第六十段

十三

和書門			
四二五	一三	一	二
九號	一函	二架	七册
類			

內閣文庫		
四〇	九	和
一七	二七	書
函	四	
架	冊	號
類		

內閣文庫		
番號	和	94
冊數	27 ( 13 )	
函號	140	184



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



卷之三十三

十九日

平簡麻理

男 德 孫 孫



十六

故其天兒屋根命者

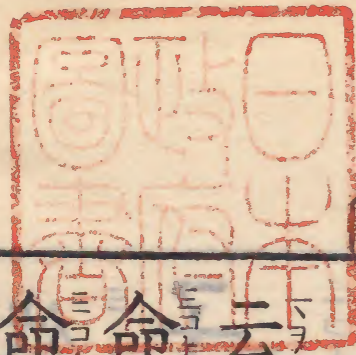
亦名八意

云天兒屋命亦云天津兒屋根

命亦名太詔戶命亦名櫛真智

命亦云櫛真命亦名大麻等能

命亦云大能命亦名豆神亦名



十六

古史傳十三出卷

神代中五出卷

和九四 辨

平篤胤謹撰

町田文成獻納之章

男 鐵胤

孫 延胤

淺草文庫

續攷



故其天兒屋根命者。

亦名八意 思兼神亦

去天兒屋命亦云天

命亦名太詔戶命亦名大櫛真智

命亦云櫛真命亦名大櫛真智

智命亦云大櫛真命亦名大櫛真智

古史傳十三

一

國出辭 津速產靈神 示云神出  
 代命 是添縣 亦子天相  
 子武乳速命 主祖也  
 命 亦名市 出子興台產靈神 亦  
 己己登魂 命 亦 娶玉主命 亦云  
 名天出辭 代命 娶玉主命 天石  
 門別安國 出女許登能麻遲比  
 王主命 出女許登能麻遲比

賣命而所生出子中臣連藤原  
 朝臣大中臣朝臣津島直壹岐  
 直四國出卜部等出祖也

天兒屋根命八意思兼神同神ある由之既云子也 第五  
 段の徵傳まよ此段の徵傳第百 御名此義思兼神と同神あ  
 三十二段の徵傳見るべし 係小依て思ふ兒屋を八意を反さほ小稱せ係ふて心  
 彌あるはし 兒屋を字小就て綴る舊説を云ふも足らば  
 師説子此神太詔戸白して大御神を招奉り

給ひし故に招祖てふ名を負て招の乎を畧き伎於を切  
免て古といふ祖を玉祖と同意ありと有まど信がとし  
其はま抄師説よ疑を許呂とも云すゆ。疑能基呂島を自  
と許く呂を許呂許呂ふて疑くあてと有る如く。此師説  
天皇卷の御下此呂理を活辭の加まるあまむ許此みぞ  
本語を依を二抄重祿て許くと云ふ呂此加とるふて疑  
と同言よぞ有る。其在太刀の中心をナカゴと云うて  
疑敷山乎あど許基の二言ふも用ぬれど疑木敷已疑  
敷あど許の一言よ多く用とるを見ても知るべし。故  
神代紀ふ田心姫と見え。古事記よ多紀理とありあま  
あ万葉二十よ妹之心多。以母加去い里とも有。まの姓  
彦屋主田心命とあり建已呂命を建疑命とも作き和名  
抄よ疑海藻を心太とも云へり此も師説の如く疑意の

名ありま古今集。信友も同趣ふ考へて古事記高津宮  
ふケレとも有り。段の御歌ふ伎毛牟加布許く袁陀邇とある許くと心  
て心をあよの意れ。記傳よ許くの下よ呂字を補へて  
る説あまど中許く呂此許をもと人此己身ふ就とる方  
ふ多く云言れ。其例を言は。言事殊媚好戀對聲あど  
此許みれ同じ熟味ひ曉べし。言を心音事を心跡殊を心  
を心を活らせて云對色を思ひ得。○篤胤。然まば兒屋  
云對を心堪る色は己もいまど思ひ得。然まば兒屋  
八意ともふ御意の思兼此彌足ませる由あり。聖徳太子  
を八耳を称せしも弥耳の義よて御耳聴く弥足ひて聞  
分ち給ふ由あり故亦名を豊聰耳とも称せるを思へし  
と云すゆ。万葉十三卷ふ物部乃八十乃心乎天地二念足

橋とある意はへあす。まど式よ。越中、国新川郡ふ。八心大  
とる発語もて八心大と云。市比古神社と云あり。此を大子係  
意を依をも思ひ合はべし。ちて根を稱名ふて。例殊ふ多  
し。兒屋命とも申はる。根は稱名を依故よ。畧死ても云ふ  
ぬゆ。師説よ。稱名を畧ても云。る例これうま有を思ふよ。  
根字あきをば古夜と訓べきうとも思へど。屋字夜  
泥と云こと。今の俗語此みあらは。万葉四卷あぜよも有  
れど。あや古夜泥と訓べしと有れど。古をぬや古夜と訓  
べ。ちて天津と云を。天之と云ふ異ある義あり。○太詔戸  
命。櫛眞智命を申す。兒屋根命此亦名と定ぬるまとは。神  
名式ふ。左京、二條坐神社二座。並月次相嘗新嘗 大詔戸命。神久慈  
眞智命。神とある御社を。其頭註ふ。天兒屋命也と云り。此  
を大詔戸。櫛眞智二名残あつて云るよ。此を古傳の遺

れるふ據て云る。正説と通えぬ也。一神を二座と為て祭  
二座。月詠命。荒御魂。神まよ豊石。まる例を。伊勢月詠宮  
間戸。櫛石間戸。神社あど猶あり。其はまば太詔戸命と申  
はる。と。上ふ見とる如く。石屋戸前ふて。麗美く太祝祠  
白して。大御神を招奉ち。功業を始て。かの解除此太諄  
辭を宣て。祓竟給ひ。はと皇美麻命。御天降此後ふ。彼天忍  
石。水を術告出し給する。此事第四百十三段 あどを思ふ  
ふ。神事ふ。必祝詞白して仕奉り給へり。と聞ゆまむ。太  
詔戸命と云御名を負せ奉るむ。石屋戸隱の招事ふ。関り  
時の功よとりて。稱とるが多るまむ。此名も其時の功業  
ふとまむ。更名ともあはるまむ。猶継ぐよ。其職を奉仕  
とるひ。其裔も。傳とるへるを思へむ。其主。斯て其裔の  
給へる職の功しきふとて。稱とりと聞ゆ。

中臣氏此神事仕奉として祝詞白ひを主とある職とせ  
る。と此因縁ふと依事あす。そはま於神祇令ふ。諸祭神  
祇官中臣宣祝詞とあす。此の義解ふ。宣布也。祝者贊辭也。  
祝詞也。とあるを混ハしき解さまあり。此を式月次祭祝  
詞。天照坐皇大神乃大前爾申進雷天津祝詞乃大祝詞  
乎。神主部物忌等諸聞食止宣天皇我御命爾坐云くと見  
え。か。く。趣ふ申ひ祝詞あ不有て。其を即今神前ふ申ひ  
祝詞を。参集れる云く此人等も聞べき由を申詞あり。然  
る。我宣聞百官故曰宣祝詞とあるを何ぞや。令本文よ宣  
祝詞とあるを字の如く祝詞を宣る由あり。大祓詞。大  
中臣天津詔詞乃太祝詞事乎宣礼あど。ある義あす。然る  
を。集解ふ。中臣宣祝詞者。時行事宣参集之社。祝部等也。  
但依文宣百官可云耳。と云へるを祝詞ハ神對ひて申  
言ある事をも已て。云れて。義解の文此混をしき。天智天皇  
ふひが。正とる杜撰言よて。論ふも足らびり。天智天皇  
紀。九年三月於山御井傍敷諸神座而班幣帛。中臣金連

宣祝詞と見え。同十年正月の下ふも。中臣金連命宣神事  
とある八年始賀式と聞えとまむ。神代の  
壽詞のとぐひ。持統天皇紀。即位の時。ま。大嘗時此條  
とぞ思むる。ふ。中臣朝臣大嶋讀天神壽詞とあ依。當時とゆも。猶上  
代の古式と聞え。上ふ説るが如し。神祇令ふ。凡踐祚之  
日。中臣奏天神之壽詞。ま。延喜式も。踐祚大嘗祭の條  
ふ。神祇官中臣云く。奏天神之壽詞  
也。有て。御代の繼く。中臣此職として。如此壽詞奏して奉  
仕るも。主と天皇命を壽。死申ひ事あがら。神事ふも關  
て。神ふ祝詞申も同意む。子。外。神功皇后紀。皇后選吉  
弑。内宿祢令撫琴喚中臣鳥賊津使主為審神者云く。而講  
曰。云くとあるも。皇后の神乃御心を問とまふ。依て神  
の降。正來坐て。誨とるを。申事。御中執て。講曰。延喜祝詞  
せる。あまむ。この時も祝詞申せること知べし。

式。凡、祭祀、祝詞者。御殿、御門等、祭、齋部氏祝詞。以外、諸祭、  
中臣氏祝詞と見え。今云、古語拾遺、神武天皇段、天、富、命、  
ありて、二祭の祝詞とも、別卷、殿祭、祝詞、次、祭、宮門と  
も、其儀見、とり、ちて、此、二、祭、の、前、文、を、考、る、殿、造、お、ど、の  
こと、を、拾、遺、の、此、お、引、る、文、の、前、文、を、考、る、殿、造、お、ど、の  
事、ハ、全、天、富、命、此、掌、と、為、お、れ、む、其、祭、を、も、お、て、主、お、  
お、を、後、ま、で、も、例、と、為、お、れ、む、加、茂、翁、説、お、御、門、神、と、  
大、宮、賣、神、と、は、太、玉、命、の、子、お、坐、お、故、お、此、二、祭、を、太、玉、命、  
の、裔、お、る、齋、部、氏、人、お、主、り、て、祝、詞、申、お、り、と、云、お、れ、む、  
御、門、神、を、太、玉、命、の、子、と、為、お、れ、む、拾、遺、の、誤、お、る、こ、を、  
上、第、五、十、七、段、お、辨、お、依、お、如、お、は、お、凡、四、時、諸、祭、不、云、祝、詞、  
お、れ、む、其、由、お、非、お、ざる、お、り、  
者、神、部、皆、依、常、例、宣、之、と、お、る、お、四、時、諸、祭、の、中、お、神、部、の  
申、お、る、お、き、祝、詞、文、を、此、式、お、云、お、ぬ、お、る、お、常、申、お、れ、と  
依、例、の、依、お、宣、れ、と、云、義、お、れ、む、  
神部とを職員令神祇官の  
雜任お神部三十人とある

是、お、り、加、茂、翁、説、お、こ、を、神、部、お、中、の、中、臣、氏、お、と、大、祓、詞、  
人、を、取、て、預、ら、お、む、お、れ、お、と、云、れ、と、お、  
お、大、中、臣、天津祝詞乃太祝詞乎宣禮也見え。大祓詞後、  
六月晦日、大祓云、く、上、部、祝、詞、事、見、儀、式、と、ある、上、部、を、  
決、免、て、中、臣、と、有、お、を、後、人、思、お、處、あり、て、私、お、上、部、と、改、  
免、書、お、る、お、太、お、を、後、人、思、お、處、あり、て、私、お、上、部、と、改、  
よ、も、中、臣、讀、お、と、こ、を、見、お、其、外、神、祇、令、お、何、お、見、  
え、て、中、臣、の、讀、お、と、を、混、お、ひ、も、お、此、を、上、部、の、讀、お、と、云、  
と、更、お、お、し、お、云、お、れ、お、儀、式、引、道、到、祓、所、云、く、中、臣、供、  
祓、の、日、お、儀、を、記、お、れ、お、外、の、書、お、引、道、到、祓、所、云、く、中、臣、供、  
麻、宮、主、讀、祓、詞、と、見、お、れ、お、外、の、書、お、引、道、到、祓、所、云、く、中、臣、供、  
讀、こ、と、見、お、れ、お、大、祓、の、頃、上、部、兼、豐、宿、祓、お、書、お、れ、  
詞、を、お、申、お、し、お、り、康、安、の、頃、上、部、兼、豐、宿、祓、お、書、お、れ、  
宮、主、祕、事、口、傳、抄、お、大、祓、お、時、お、條、お、次、讀、詔、戸、退、出、と、  
る、下、お、大、祓、詞、を、記、お、さ、お、り、神、膳、供、進、の、後、撤、お、る、  
依、お、り、其、外、大、嘗、會、新、嘗、祭、お、神、膳、供、進、の、後、撤、お、る、  
お、宮、主、詔、戸、を、申、お、例、を、記、お、さ、お、り、神、膳、供、進、の、後、撤、お、る、  
轉、例、を、多、く、記、お、さ、お、り、後、お、中、臣、お、職、の、宮、主、お、多、く、  
轉、お、さ、お、り、宮、主、お、十、部、氏、人、の、補、お、る、例、お、さ、お、り、  
古史傳十三  
〇六



詞申はもいとく故実ふ万葉十七ふ奈加等美乃敷刀能  
達へるふを非ぶる。里等其等伊比波良倍云くとも有也此らを合せ思ふよ。  
天兒屋根命は主也給ふ神事を其子孫に受傳えりて奉  
仕まらるる中ふ殊更ふ別て祝詞申は事を主とある職と  
せらる。故は依事あり也。上ふ記せる如く大殿御門の  
祭は齋部の祝詞申を除てを  
異氏人此朝廷事ふ祝詞申せる例を曾てあることあり  
然るを古語拾遺よ石屋戸隱の事を記せる処よ令太玉  
命稱讚亦令天兒屋根命相副祈禱ま神武天皇御世の事  
を記せる処よ立聖時於鳥見山中天富命陳幣祝詞禮記  
皇天あどあるをいふうし此書を齋部廣成宿祢の已が  
氏の甚く衰微とることの慷慨を主と書れとる物ある  
が故ふかく依言過。○櫛眞智命と云名を負坐依あやを  
も有るありなり也。此も上ふ見ある如く石屋戸隱の度ふ鹿トは太非を始

あるへ依功業を稱ある御名あり。其を神代紀ふ天兒屋  
根命主神事之宗源者也。故俾以太占之卜事而奉仕焉。と  
あるを思ふはし。此を兒屋根命は職業として。神事を主  
給へ依が故ふ。其神事は宗源とる。卜事もて仕奉れる由  
あり。此事あや委くを第百九段よ説を見よ。然まむ此由ふ依て。稱は依  
御名あると著明し。予はかく思へど信友は兒屋根命  
降坐る後よ再登らして天津御膳水を賜たり給ひなる  
功を稱へて父神と同状に祭らる。上ふ稱は名あるべ  
しと云り。然れど此はて櫛明玉櫛石間戸櫛稻田毘  
賣あや此櫛と同く奇は義もて。稱號あり。眞智ハ。即麻邇  
ふて。太非を始給ふる故ふ。かく稱せるあり。麻邇麻智同  
言ある由也。

第七段太光の処  
よ委く云へゆき。ちて上ふ引る神名式。左京二條坐神社  
二座也。此二名を以て祭られ。此を卜庭神と申て。卜部の  
ト事行ふ時ふ也。必此神を迎て祭る也。其ト事を  
始とる神  
るふ依。此事も。信友が委く考とる説ふ。右社を四時祭式  
相嘗祭。ふ也。太詔戸社二座坐左京二條と見え依を始て。  
の條。已後の書どめふも。悉二座を竝せて。大詔戸てふ名此み  
を申せ也。日本紀畧よ。延喜三年五月。授左京大詔戸神。從  
七月正三位を授賜へる文よも。大詔戸神とあり。此も二  
座を並せとる称あり。○今云。神名式頭注ふ。此社を天兒  
屋命也と云。依也。大詔戸久慈眞智命をこ  
免ての譚ある也。是よても知るべし。ちて貞觀儀式。  
奏御卜儀の下ふ神祇官申官く頒告諸司云く。六月一日

十二月 祭卜庭神二座中臣二人。折卜宮主一人。卜部八人  
亦同。著明夜まよ四時祭式。此御躰。ふ。卜庭神二座御卜始終日  
祭之とあるも。かの太詔戸社二座とある是也。其古  
龜甲の御卜ふ也。春日南室町西角よ御坐は社を。太詔  
戸明神と申は。件社を此占の時念じ奉るとあり。此春  
日南室町西角よ御坐は社とあり。ハ上ふ奉るとあり。左京二  
條坐神社とあり。所あるべし。此社のこと。を山城志よ。在  
三條坊門北坊城東司政所と云。今二條御城の未方  
の外ある京町奉行を置る。東屋敷のおと。聞ゆるふ  
就て人よ尋ゆるふ。其処よ。舊と。春日大明神の社あり  
と云。り。まよ京人上田百樹よ。古此地理を問ふよ。云ら  
都城の古図とよ。見ゆる。古の春日。今三條丸太町  
辺よ。夫と。南二條と。古の春日。今三條丸太町  
属り。と。見ゆる。其古の春日。今三條丸太町  
と。可し。と。云へり。必其あるべし。山城志よ。云る。證と  
を祭ら。まて。名高く坐は。故ふ。大詔戸社を。春日。社とも申

志そまをり轉りて其辺の町名とも為れるあるま江  
彦らまを今春日大明神と申も由あることなり  
次第小御體御占神祇官人自朝日籠本官迎太詔戸明神  
あど有子とめても明外也。朝野群載六卷奏龜上御躰  
推可否事同云くとあるをト事の時小祝詞申は状と聞  
えとり此を決くかのト庭神小祝詞申てトふる由あり  
あ布式小大和国十市郡天香山坐櫛眞命神社。大月次新  
麻等乃と云何也。大麻等乃知大ハ美称麻等ハ麻智と  
知天神と助辞知を男を称へ云例の言あり大麻知乃知と  
は詞の志らべ好らぬ故大降と神外乃知を称あらへる  
あるべし天神と稱ふハ佛説よて称去ガあ也其を字音  
了唱ふ天神と稱ふ武藏国多麻郡も式大麻止乃豆乃  
天神社と何るも同命社あるべし。後風土記の武藏国部  
同郡小も大麻止乃知天神と有り。○今清和紀小貞觀元  
云此社今も御嶽山と稱ひて大社あり。

年正月授大和国天香山大麻等野知神從五位上とある  
は。式小元名とある小叶ひて同社也。此同度小左京職  
智神小正五位下を授給へる由同紀小見えたり。○今云  
式小櫛眞命とあるを眞下小智を脱せるも櫛眞智命  
あるべしと思はれまども眞の一言も麻迹の意を  
通もるこそ第七段太兆此処に記しと依如くあれハ櫛  
眞命とも云はと添上郡小太詔戸神社。大月次と有。此  
々むらし。詔戸社を大和志小今未詳と云り或書小大和をり紀伊  
国へ越る道小大詔詞越と云処ありと云り由あり。聞  
ゆまど今添上下郡とも小紀伊国へを接らざまバい  
が有むあ布古の国図あぞ小考あバ證と為ること有  
あ此も大社列ふ。月次新嘗小預り給ひて同等小饗志  
らひ給へ依をも思牙ハ。既く大和よしして此二神を祭ら  
れ給る哉。然らむ櫛眞命と同じ趣小彼貞觀の度小神階  
を授らるべきを其事の見え然を何あらむ然

れど既く記し脱されたるも有べく又同等子祭らま  
さる神ありとていおも必同等小位階を授賜へる例と  
も聞えざれ然ら後小今此京定免給ひてと也彼二神  
でも此考小害れし後小今此京定免給ひてと也彼二神  
を二條左京職子も徒し祭られたるを依るし左京小祭  
二座も並小月並新嘗小預り給へり神名式頭注小左  
京二條大詔戸命神社和州添上郡對州下縣郡天兒屋命  
也と云りこれ然思ふ由也神武紀小天皇長髓彦を征て  
も由有て聞也  
大和因小入御處也天皇御夢也天神の訓賜へ依御言  
小宜取天香山社中土以造天八十平瓮敬祭天神地神亦  
爲嚴呪詛如此則虜自平伏と誨し賜へる御言也ま小ま  
小推根津彦と弟宇迦斯と小汝二人到天香山潛取其巔  
土而可來旋之勅して使し給ひしうば天香山社中土と

ある小取其巔土と二人予勅給へる社を巔小在し  
依る小加茂大人曰天香山の北北山足小櫛眞神社今も  
御坐候と飛鳥社の神主飛鳥土佐と云人の云りと云れ  
たり其末後小山足小迂しとるを依るし其むいおとも  
いおとも例二人其山小到也土を取て來れるを天神の  
ある事あり二人其山小到也土を取て來れるを天神の  
御訓也任小して諸虜を平伏給ひし由見と依る按ふ其  
天香山社を決小櫛眞命神社小也太詔戸命と云をも併  
せ祭られぬむ其由を下小云べし其を釋紀小引る龜  
兆傳太詔戸命進啓と小住天香山龜津比女命今稱天津  
詔戸太詔戸命也とある龜津比女命と云るおとを論小  
も足ら祿と住香山といひ今天津詔戸太詔戸命也と何  
依を思ふ也當時天香山小太詔戸神の坐る趣小聞也

龜非傳を龜十の鹿十たり貴術ある由を偽説して漢籍  
龜策傳を龜聖を王聖夫子と稱ふ事の何るあどを思ひ  
たりて龜津比女と云稱を作り其を比女としも云るを  
雄畧紀よ大龜便化為女と何る故事あどを思ひ寄りて  
造れる説あるは然る偽書ふを何まぜ凡て古き書え  
正うらぬ物も其作る時のさまよ依りて能撰むと死ハ  
証とある事もほ是ふ據て考るふ左京二條坐せるが如く既  
く天香山社よ太詔戸櫛眞神の坐り依を尋常ハ大麻等  
乃知神社とれみ申習と依あるはし其元既く延喜の帳  
ふ元名とて載られ  
清和紀貞觀元年の下ふも去り記されとまむあり彼左  
京二條坐神社二座を併せて太詔戸命神社と申せるが  
如き例と坐べし然るを帳よ櫛眞命神社を申ひ名を當  
時の稱せして奉られとるを二條左京よ久慈眞智神と  
稱して祭らるふたりて同けて香山ふ此神社の坐ま  
稱よ載されとる依べし  
はふ就て按ふふ幽き由縁あて聞ゆる事何也其石

屋隱の度ふ兒屋根命專と招事此神事ト事を執行ひて。  
其時よ用ひとる種くの料を多く天香山の物を取給へ  
るを天上ふても當初此神此香山ふ住給へるれはし。  
故皇美麻命此御從して天降坐よおきて其天香山を分  
ち天降しとる大和国の香山ふ天上の舊此如く此神の  
鎮坐るれらむ篤胤云此考殊よ奇しく予が考と符り其  
と興台産靈命の御名此処ふ云を見え  
おま上下云依神武紀よ見と依香山社其處よして即帳  
よ載  
られとる櫛眞命神社と何るを是あ  
依べきこと上ふ云へるがおとし  
志て大和国よ入坐し天神の御訓ふ依て此社の土を取  
也云く志て諸虜を平伏とるひ遂よ當国よ皇居を定賜

ひ。寶祚の鴻業残いや益々小堅固とるるを甚く淡く  
貴妃幽契の事とぞ思ふ。篤胤云、お天香山を大  
の由縁を予が考も、信友が考も多うるを其  
を取去べて、第四百四十五段に委く云べし。故、左京二條  
坐神社二座は香山社をゆ徒しあるあらむとを推量ら  
ゆ、あす。猶式ふ。對馬、因上縣郡能理刀神社。清和紀、貞  
觀十二年三月、授、從五位下、縣郡太祝詞神社。名神大。此も貞觀十二年、  
下、とあり。羊の同度、お授、正五位下、  
と見えぬ。れど何也。此二社も久慈眞知命をも竝せ祭ま  
るおゆべし。此因、此御社の在、こと  
を四因、上部、此、出雲風土記、同郡、祝詞  
社とあるを、是、あるべし。ま、式ふ。出雲、因  
意宇郡も能利刀神社何也。出雲風土記、同郡、祝詞  
社とあるを、是、あるべし。  
上、件を信友が正上考ふ云、中ふ、已が心、叶する説を

ぬき出て記せる何也。○津速産靈神、神速魂命。此神の事  
蹟を二典を始、諸書お傳、あき故、御名此意を解べき  
便、あ、残、兒屋根命の事蹟をゆ及、布して思ひ得とる考  
は何也。下ふ云、神速魂命とも申、御名を、林羅山先  
生の神社考ふ、かく有、取れ也。當時さる古書の有し、  
あ、タケチ、ハヤ武乳速命。此命は、右京、姓氏録、天神、添、縣主、出、津速魂、  
命、男、武乳速命也。と見、とる、み、了、て、他書お見、え、但、  
舊事紀、小、見、これ、も、興、登、魂、命、の子、て、兒、屋、命、の、弟、  
と、せ、り、此、ハ、姓、氏、録、を、拾、ひ、取、り、と、て、次、を、誤、れ、る、あ、る、  
べ、し、ち、速、字、姓、氏、録、今、本、ど、も、遺、作、る、を、決、く、誤、写、  
あり、今、舊事紀、も、然、作、る、を、姓、氏、録、の、誤、を、承、と、依、あ、る、べ、  
引、て、速、と、作、る、小、徒、ま、也、當時、の、古、本、も、然、作、し、み、こ、そ、

○天相命アマノヒコ市千魂命イチチバタマ魂を牟須毘と訓べきりとも思乎と。産靈と書る例を見されむ。此を多麻と訓はし。ちて右二命の御名此意も下ふ云はし。○添縣主添縣を神代紀ふ。層富縣繼體天皇紀ふ。匝布とある是ふて。大和国あり。後ふを二郡ふ分られて。和名抄ふ。添上曾不乃加美添下曾不乃之毛と見と。其二郡ふ分給乎はむ。いばむ此御代と云あむ。知はるらむとも。欽明天皇紀ふ。倭国添上郡と見ぬれむ。最古に御世あり。ちて此縣を謂ゆる六御縣の一。て。即神名式ふ。添下郡ふ。添御縣坐神社大月次新嘗清和天皇紀ふ。貞觀元年正月。授從五位上とあり。此社今三碓村と云ふ在て。添田天

神とも天王とも称はと。帳考ふ云。天神と武乳速命の申去あむ。天降らむ。神と云意あるべし。御社あるはし。ちて此命此裔の紀ふ見ぬるは。續紀ふ。天平神護元年二月。大和国添下郡人。左大舍人大初位下縣主石前賜添縣主と云こと此見とるのみあり。姓氏録を後世に記されし録あり。添縣主出自津速魂命男武乳速命也とあり。石前てふ入を。此命の裔あり。むこと疑ふ。○興台産靈神を神代紀ふ。中臣連遠祖興台産靈此云許語等武須毘姓氏録ふ。己く都牟須比命子。天乃古矢根命。藤原系圖ふ。津速魂命。市千魂命。居く登魂命天兒屋根等とあり。御名の義。御子兒屋根命の功業を延て考ふるふ。興台を心利は義と通えと。反正天皇卷ふ。許基登臣と云人あり。記傳は名義いまだ

考得は神代紀小興台産靈此云許語等武須毘と云神名  
も有とむり云まより此臣の名も義を同じむるべし  
其を万葉三卷小君し座祓を心神也形しほと離家いま  
以吾妹字停う祓山隱於ま情神も亦れ十一吾情利の  
生ともれき十二小山菅れ止て公を念ふも吾心神  
の頃を亦死此心神を舊訓おタハレヒを訓るを加茂翁  
まと師は十九卷小白玉の見が不し君を見久ま夷小  
しをまバ伊家流等毛奈之とあるはいけりとも亦れと  
云とを異あり等毛利心亦せ云利おて集中小心神も亦  
しせ書るもいなるともれしと訓むと言れしと畧解小  
有もいか十三小戀れ茂小情利も形し十九小吾情度の  
が有  
奈具依日も形しおと詠る情利亦字情度とる依度  
を假字心神情神れせける神を謂ゆる義訓其を十一  
あり神字小利の意あることは云も更あり

小極太甚利心云ふ十三小聞を正物を念ふは我胸を破  
て摧けて鋒心も亦し二十小焼太刀の刀其已呂も亦  
ばおと詠る利心亦十二卷小丈夫之聰神も云ふとあ  
る聰神も是亦お形し卷小天地少利心ありまと思  
ひし吾や雄心も亦ま然む心利利心あり反さほふ  
あるも相似とる意あり云依れみ亦そ有ま彌心心彌の反さはあると同じ義小  
て許基登とを御心眞利く彌足ひ坐る由れ御名亦り許  
を清ても濁ても云を兒屋命の御名れ亦云如く心を  
疑と同言おて疑を万葉小疑敷と濁るれ亦み亦ら今世  
亦も膏亦どの硬ま亦るをコル也もコル也も亦云め  
也万葉十一小夕疑の霜置おる云と有を亦思ふべ  
しほさ此小就て按ふも氷をコホ以せ云を疑字延とる  
言ありなり其在天地初発の処亦見とる許袁呂許袁呂



在疑意あるを思ふべし。但し氷と許袁呂と、仮字達へる  
 小疑有べしと、富袁を安ふ言を延るをて加ふる辞あ  
 り。音の違へる小然志も抑ふるまじきあり。又郡をコ  
 ホリと云む。韓語ありと云る人もあまじき。民戸の集ま  
 たり。此名あるは、疑字の意あり。又大祓詞の始ふ集待と  
 ある子あどの許ふ疑字の意あり。又大祓詞の始ふ集待と  
 ある集をウコナハルと訓依もウを加ふる辞も今俗小  
 ナハルと云疑あむる。此ハハルを同言うと覚ゆ。まに疑  
 コダハルを云詞は此コナハルを同言うと覚ゆ。まに疑  
 字の義をも思ふ。氷不から疑ふ作るハ水の結べるを  
 見て疑ひ疑へむ。おの如く思ふまじきと云。たて許々呂は  
 いふ義小取れる字の如く思ふまじきと云。たて許々呂は  
 疑義ある子就て。吾意ふて。心と云物の靈妙ある趣を思  
 ひ。心字此眞の象をも思ふ。心字書るも。此意を得て作  
 れる。事と所思と也。人を漢字のあと能知まるは。ちて許々  
 呂々り。思を發依あまむ。於毛比と云言の本を。萌と同言

ふて。疑とる心とぬ。萌出る義ふて。母比ふ於の冠とる詞  
 うを非じう。但し是も萌をモユと活き思ふ思ふ思ふ  
 ど同言も種く。活けむ。活用の仮字達へると云む。う。され  
 のりたる例もこまう。れ。其を佐夜理をもと。佐波理  
 也。同語あるを夜と波と変まるを以て。も。曉るべし。力ホ  
 リ。カヲリも同じ。まに。覺え。覺ゆも。本ハ。於毛比と同言あ  
 らむ。と。ち。牙。覺ゆるを。や。上。小。云。まに。燃ぬ。同言う。を。所。思  
 る。氷。許。袁。呂。も。同じ。例。と。云。べし。まに。燃ぬ。同言う。を。所。思  
 ち。そ。は。八。意。思。と。係。あ。る。状。も。由。有。て。聞。え。火。穂。の。萌。上。る  
 状。を。於。毛。比。て。ふ。言。れ。萌。寄。る。状。あ。る。ふ。思。ひ。合。さ。依。ま。む  
 ち。也。歌。詞。も。万。葉。一。卷。小。念。曾。所。燒。吾。下。情。ま。に。五。卷。小。  
 心。波。母。延。農。云。く。十三。よ。我。情。燒。も。吾。あ。り。愛。や。し。君。子。戀  
 る。も。我。心。柄。あ。ど。云。依。を。も。思。ふ。ば。し。之。君。こ。ふ。る。涙。し。れ

くむ唐衣曾の何より色燃あまし小町人小逢をむ扱  
きのあきふを思ひおきて曾はちり火ふ心やけをり能  
宣集長哥子空蟬の鳴夏來れむ曾のうち燃のみこと  
蚊や火火煙とやぐて云く兼輔集ふ櫻花雪ふ燃る  
袖をばもをそふ焦るく曾をまされるあど猶多う  
正漢籍ふめ焦心焦思れど云るを符へる語あり  
其萌寄りて凝物を直ふ許く呂と名けし依を其やぐる  
身體ふ固有る火の態あまむ燃る心焼る思れど云詞を  
とく叶子正お不種思ひ得ある事ども有れど  
台産靈神をば思の靈妙ある功德を持給予るが故ふ  
産靈てふ御稱をも負坐るれ依べし高皇産靈神皇産靈  
申は産靈の意多思ふべし此神を何ふ思えれむ書  
紀よと一書ふ一所上ふ引る如く記さまざる迄ふて  
神とも命とも言れざるを甚く卑免られし依物あり書  
紀の例安べて撰者の漢意ふ神の功德を深くも探祓安

申めて神と必命とも記れざるが此外ふも數あり其元  
本ふを疑ふしそ古事記を始め餘書も其命某神と  
ることを書紀は多く神命の字はあきを以ても辨ふ  
るし故世の事知人さち此神は功德を見得る注せる  
人をも一人ふ有ることあり故是を以て今傳むる古書  
此神を神と稱せる事を見ざれども已ぐ私ふ然依り此  
畏る畏みも神字を補へて記し奉れるあり  
神の思慮は智坐ける事蹟の見えざ依を御子天兒屋根  
命亦名思兼命ふ至りて其御徳は顯を依べき幽き所由は有  
志事あるはし其を稚産靈神の御徳は其御子豊宇氣毘  
可居く登魂命とも申は魂は例有まむ年須毘とも訓べ  
志然れど藤原系図ふタと訓み津速産靈神を神速魂  
命をも申せる例もあまむ古く二様ふ申けむと覺ゆ  
る故ふ今を夕ちて兒屋命はとく大詔戸白し給予るふ  
一を訓む

依て。石屋戸を堅く刺閉て。隱坐る大御神さる。若此言  
此麗美ハ有らばと詔ひ天。出御也。抑言也。心神の緒を辨  
牙述る物也。此を美しく言得ばは。思慮也。徳用を成  
おと能されむ。心也言と。とく相應也。ハ有らばき物ある  
お。兒屋命也御心也。八意也。御言也。あう美う也。しお就て  
按ふ也。万葉也。歌どもも言靈とあるを寓の言ぐは。非  
也。居く登魂命の事也。思むる。其ハ五卷也。多治比廣成眞  
人の遣唐使也。出發を祝て。山上憶良主也。詠て贈れる長  
歌也。神代也。云傳けらく。虚見津倭因を皇神の嚴し也  
因言靈也。幸ふ因と語繼ぎ。云繼々也。云云。十三卷。人麻呂

歌集也。長歌の反歌也。志貴嶋の倭因也。事靈也。佐くる因  
ぞ眞福在とく。此も其長哥よとまむ。異因也。往く人を祝  
通也。思むるれど。事言共也。借字也。言ハ正字あらむと。一  
や。て。心利靈あらむも。知はらば。あど詠也。此を其  
長歌反歌を並べて。能見依也。古語也。云繼來れる如く。倭  
因は。言靈神の佐け幸ふ也。依て。言語の麗美也。因ある故  
よ。其美し也。死詞をもて。壽言は。まむ。壽末も。く。天地の諸  
神也。感坐して。福へ給ふ因ぞ也。云云。外也。長れむ。此も  
本書の長哥反哥共也。とく味ひ読て。此旨を辨ふべし。殊  
よ。憶良主也。長哥も。右も引く詞の末也。海原の辺也。も  
お。も。神留り。宇志播吉也。いま。諸也。大御神也。ち。船也。も。道  
引まを。し。天地の。大御神也。ち。倭。大因也。久方也。天の御  
也。天翔也。見渡し給ひ事也。了也。還日也。又更也。大御神也  
ち。船。舳也。御手打掛て云云。と詠れ。とる意用ひを。熟く思

彦し。仁明天皇紀。天皇命の宝算を賀奉れる長哥。日  
本乃倭之囿波言靈乃當囿度曾古語尔流來礼留神語尔  
傳來礼留云々と詠るも同じ意あり。當字を久老神主が  
富の誤としてサキハフと訓るは然る説あり。福字をサ  
キと訓ふ同じ前ふを字のまゝふ。アタルと訓む。ウも  
思し。ウど古語とも覚え。はと万葉十一卷。事靈の八  
十。衢ふ。タ占問ふ。占正ふ。告れ。妹相依と詠る。事靈神  
幸ひて八十。衢を行く人よ。正し。死占を誨し。給へと云ふ  
意あり。故ま。と此歌ども。依て。石屋戸隱の時。兒屋命の  
白給。予る。大詔戸言。大御神の感給へ。依事を思ふ。興  
台産靈神。己命の御子。兒屋根命。言靈幸へ。坐て。詔戸言  
残美。しく。白けし。給。予る。故。大御神の感けて。出御る  
ふ。ぞ有。々。依。然れ。古。道。を。學。び。て。心。利。う。ら。む。事。を。思。ひ。  
言。を。も。美。の。ら。む。と。思。え。む。人。を。と。く。此。神。の。御。靈。を。祈。願

奉る可き事。ふ。あ。そ。此。神。の。心。利。言。語。ふ。幸。予。給。ふ。こ。と。を。  
何。を。の。囿。も。同。じ。恵。み。を。蒙。れ。ど。も。御。囿。を。神。此。本。囿。あ。る  
故。了。言。語。此。道。の。殊。ふ。正。しく。傳。え。り。て。活。用。自。在。ふ。麗。し  
き。囿。あ。ま。む。別。て。古。語。も。も。言。靈。此。佐。く。る。囿。事。靈。の。幸。ふ  
囿。と。を。云。繼。る。依。あ。り。言。靈。と。い。ふ。を。實。ふ。神。在。り。と。を  
得。知。ら。ぬ。徒。ふ。偶。言。の。如。く。説。成。せ。る。を。居。く。登。魂。神。の。事  
を。し。明。ら。ぬ。と。る。人。此。無。り。し。ら。ば。あ。り。景。行。天。皇。此。大。御  
語。ふ。大。倭。囿。者。以。行。事。負。名。囿。也。と。詔。へ。る。如。く。古。ハ。そ。此  
行。狀。事。實。の。無。き。者。ふ。其。と。聞。ゆ。る。名。稱。の。有。げ。き。由。を。絶  
て。あ。き。理。あ。れ。む。神。此。御。上。ふ。譬。ひ。そ。此。事。蹟。此。傳。え。ら。ざ

依も。御名此義を及けし考へて。其御行事を伺ふこと。是  
古學の專要とけべき業ぞ有ゆらる。世に和學者因學  
人數あるが。其に列哥文詞章のいと小き考説をむ。何く  
れと書記せるが。多りまど神に御功德の最も大なる事  
ふを思ひも挂や有らむ。其中にも言靈家あど稱して  
言靈の道此本をし考へ究めたり。あど言誇らふ輩も有  
る由あまど眞の言靈の神に坐るとも知らざるハ如何ぞ  
や。言靈の神を知らばして。言語の道を釈ふと云む甚も  
可笑し。死後あぐみ大鏡に醍醐天皇の皇子に生坐る。五  
十日此餅を殿上ふて出させ給ふる。維衡中將。一年に  
今宵うぞふ依今とては。百年まで此月影を見む。と壽白  
せ依ふ。天皇の御歌に祝ある言靈あらば百年に後も盡  
せぬ月をよそ見ぬ。堀川百首に俊頼朝臣言靈の於不束

あらしをかみはと。梢あぐらも年を越りぬ。此哥の意を  
びと云物に。今俗に節分の除夜に果樹ある家にお一人  
樹上にお上。一人を斧をもて木の本に至り。其樹に向ひ  
て。來年をく実生るや。実生らばや。生らば伐らむと云  
と。死樹上は。人生ませうと答ふ。かく為れば。來年をく実  
生ると云へり。是言靈の眞福に在るあり。さまば古にも然る  
已に民間に有し。故に梢あぐらに年を越ると詠まし。ふ  
やをうみはとを。拜はと云うや。此朝臣の加へる事をと  
て。出て上手の口におまうせて。詠まると哥少うらば。然れ  
ど。近俗に去依所も古の遺風あり。此等此歌も言靈に意は  
るべしと云るを然る説あり。此等此歌も言靈に意は  
同じ。故に上古には物を造り事残行ふよ。祝言しお物せ  
て。と聞ゆ依あど多りゆ。其に神功皇后の酒賀に御歌に  
此御酒を云く。少御神の神祝く狂ふし。豊祝く廻し奉來  
し御酒ぞと詔ひ。建内宿禰に御答白せる歌に。此御酒を

釀<sup>カ</sup>乃<sup>カ</sup>む人<sup>カ</sup>を云<sup>カ</sup>く歌<sup>カ</sup>ひ抄<sup>カ</sup>く釀<sup>カ</sup>乃<sup>カ</sup>まかも舞<sup>カ</sup>抄<sup>カ</sup>く釀<sup>カ</sup>けま<sup>カ</sup>ら  
も。此御酒の御酒此阿夜<sup>アヤ</sup>ふうふぬし。と詠ま<sup>カ</sup>し故事<sup>カ</sup>。此  
之應神<sup>オウジン</sup>天皇<sup>テウキウ</sup>卷<sup>マク</sup>はと神樂歌<sup>カミガク</sup>み。杖<sup>ツエ</sup>を皇神<sup>ミコカミ</sup>の御山<sup>ミヤマ</sup>此杖<sup>ツエ</sup>と山  
人<sup>ヒト</sup>此千歳<sup>チサイ</sup>を禱<sup>イハ</sup>せ切<sup>キ</sup>れる御杖<sup>ミツエ</sup>ぞ。外<sup>ソト</sup>と有<sup>ア</sup>をも思<sup>オモ</sup>合<sup>アヒ</sup>はべし。  
其<sup>ソノ</sup>を言<sup>イハ</sup>美<sup>ミ</sup>く祝<sup>イハ</sup>ふ詞<sup>コト</sup>ふ也。善神<sup>タカミヤ</sup>の吉事<sup>キキ</sup>を幸<sup>サチ</sup>牙<sup>ハ</sup>凶<sup>トク</sup>く志<sup>シ</sup>死<sup>シ</sup>詞<sup>コト</sup>  
ふは善神<sup>タカミヤ</sup>の感<sup>カン</sup>給<sup>タマ</sup>を祿<sup>ロク</sup>ば。在<sup>ア</sup>神<sup>カミ</sup>此所得<sup>ソコトク</sup>て凶事<sup>トクコト</sup>をも引出<sup>ヒキダ</sup>ま  
バ外<sup>ソト</sup>也。故<sup>ユヘ</sup>古<sup>コ</sup>は更<sup>マ</sup>あゆ。今<sup>イマ</sup>世<sup>ヨ</sup>ふも事<sup>コト</sup>を成<sup>ナ</sup>さむと爲<sup>ナ</sup>るふ也。  
まお壽詞<sup>ホキゴト</sup>をぞ專<sup>ムネ</sup>とひあゆ。古<sup>コ</sup>を言<sup>イハ</sup>は<sup>カ</sup>大殿<sup>オホノミヤ</sup>祭<sup>マツル</sup>酒<sup>サケ</sup>賀<sup>ガ</sup>室<sup>ムロ</sup>壽<sup>ホキ</sup>  
今<sup>イマ</sup>世<sup>ヨ</sup>も地<sup>チ</sup>平<sup>ヘイ</sup>家<sup>ケ</sup>建<sup>タテ</sup>田<sup>タ</sup>殖<sup>シク</sup>稻<sup>イネ</sup>酒<sup>サケ</sup>造<sup>ツクリ</sup>その餘<sup>オホ</sup>何<sup>ナニ</sup>事<sup>コト</sup>をひるふ  
も壽<sup>ホキ</sup>哥<sup>カ</sup>を哥<sup>カ</sup>ひ囉<sup>ラ</sup>して物<sup>モノ</sup>安<sup>ヤス</sup>るハ古<sup>コ</sup>此遺<sup>オシ</sup>れる風<sup>カゼ</sup>あり然<sup>シカ</sup>ま  
む常<sup>トコ</sup>云<sup>イハ</sup>ふ語<sup>コト</sup>言<sup>イハ</sup>ふも心<sup>ココロ</sup>を抄<sup>サシ</sup>けて凶<sup>トク</sup>くしき言<sup>イハ</sup>む云<sup>イハ</sup>まじ死<sup>シ</sup>  
事<sup>コト</sup>ふこそ其<sup>ソノ</sup>を神<sup>カミ</sup>代<sup>カタリ</sup>たり詛<sup>ソコト</sup>言<sup>イハ</sup>ふ驗<sup>トク</sup>あることハ更<sup>マ</sup>ふも云<sup>イハ</sup>

び今<sup>イマ</sup>も古<sup>コ</sup>め人<sup>ヒト</sup>を祝<sup>イハ</sup>ぐ哥<sup>カ</sup>よ。所<sup>トコロ</sup>念<sup>オモ</sup>え或<sup>ナ</sup>凶<sup>トク</sup>くしき詞<sup>コト</sup>ををみ  
合<sup>アヒ</sup>せて災<sup>サイ</sup>の出<sup>デ</sup>來<sup>キ</sup>し例<sup>レイ</sup>も少<sup>オウ</sup>うらび生<sup>ナ</sup>さる志<sup>シ</sup>死<sup>シ</sup>倫<sup>リン</sup>を其<sup>ソノ</sup>を  
さる禍<sup>ワ</sup>事<sup>コト</sup>此出<sup>デ</sup>來<sup>キ</sup>る端<sup>ハタ</sup>み。もく也<sup>ナ</sup>あ<sup>カ</sup>く詠<sup>イハ</sup>應<sup>オウ</sup>子<sup>シ</sup>とる物<sup>モノ</sup>ぞあ  
ど事<sup>コト</sup>も外<sup>ソト</sup>げよ云<sup>イハ</sup>免<sup>メ</sup>まど然<sup>シカ</sup>る古<sup>コ</sup>意<sup>イ</sup>を得<sup>エ</sup>ざる人<sup>ヒト</sup>を。さも有<sup>ア</sup>  
らむ有<sup>ア</sup>ま<sup>カ</sup>眞<sup>マコト</sup>の古<sup>コ</sup>意<sup>イ</sup>を探<sup>サシ</sup>祿<sup>ロク</sup>ちて姓<sup>セイ</sup>氏<sup>シ</sup>録<sup>ロク</sup>左<sup>サ</sup>京<sup>キョウ</sup>天<sup>テン</sup>神<sup>カミ</sup>部<sup>フ</sup>ふ畝<sup>ウネ</sup>  
む人<sup>ヒト</sup>を。とく思<sup>オモ</sup>ふべきあ也<sup>ナ</sup>。ちて姓<sup>セイ</sup>氏<sup>シ</sup>録<sup>ロク</sup>左<sup>サ</sup>京<sup>キョウ</sup>天<sup>テン</sup>神<sup>カミ</sup>部<sup>フ</sup>ふ畝<sup>ウネ</sup>  
尾<sup>ビ</sup>連<sup>レン</sup>天<sup>テン</sup>辭<sup>ジ</sup>代<sup>ダイ</sup>命<sup>メイ</sup>子<sup>シ</sup>。因<sup>イン</sup>辭<sup>ジ</sup>代<sup>ダイ</sup>命<sup>メイ</sup>之<sup>シ</sup>後<sup>ノチ</sup>也<sup>ナ</sup>と有<sup>ア</sup>ふ。はと和<sup>ワ</sup>泉<sup>セン</sup>因<sup>イン</sup>天<sup>テン</sup>  
神<sup>カミ</sup>部<sup>フ</sup>ふ畝<sup>ウネ</sup>尾<sup>ビ</sup>連<sup>レン</sup>大<sup>オホ</sup>中<sup>チュウ</sup>臣<sup>シン</sup>之<sup>シ</sup>同<sup>ドウ</sup>祖<sup>ソ</sup>天<sup>テン</sup>兒<sup>ニ</sup>屋<sup>ヤ</sup>根<sup>ネ</sup>命<sup>メイ</sup>之<sup>シ</sup>後<sup>ノチ</sup>也<sup>ナ</sup>とも  
也<sup>ナ</sup>。此<sup>コノ</sup>よ依<sup>ヨ</sup>て考<sup>カウ</sup>ふるふ。天<sup>テン</sup>辭<sup>ジ</sup>代<sup>ダイ</sup>命<sup>メイ</sup>と申<sup>マウ</sup>はむ。居<sup>イ</sup>る登<sup>トウ</sup>魂<sup>コン</sup>命<sup>メイ</sup>因<sup>イン</sup>  
辭<sup>ジ</sup>代<sup>ダイ</sup>命<sup>メイ</sup>と申<sup>マウ</sup>はむ。兒<sup>ニ</sup>屋<sup>ヤ</sup>命<sup>メイ</sup>よぞ有<sup>ア</sup>る依<sup>ヨ</sup>。其<sup>ソノ</sup>ハまお畝<sup>ウネ</sup>尾<sup>ビ</sup>と也<sup>ナ</sup>。  
大<sup>オホ</sup>和<sup>ワ</sup>因<sup>イン</sup>香<sup>カウ</sup>山<sup>サン</sup>の山<sup>ヤマ</sup>足<sup>ソク</sup>ふ在<sup>ア</sup>る地<sup>チ</sup>名<sup>ナ</sup>れるが。此<sup>コノ</sup>を氏<sup>ウヂ</sup>小<sup>オホ</sup>負<sup>ネ</sup>るハ。  
彼<sup>カノ</sup>山<sup>ヤマ</sup>ふ也<sup>ナ</sup>。上<sup>ウヘ</sup>よ言<sup>イハ</sup>る櫛<sup>シ</sup>眞<sup>マコト</sup>命<sup>メイ</sup>神<sup>カミ</sup>社<sup>ヤ</sup>何<sup>ナニ</sup>依<sup>ヨ</sup>故<sup>コト</sup>ふ。兒<sup>ニ</sup>屋<sup>ヤ</sup>命<sup>メイ</sup>の御<sup>ミ</sup>末<sup>マツ</sup>  
此<sup>コノ</sup>一<sup>ヒト</sup>派<sup>ハ</sup>もと此<sup>コノ</sup>地<sup>チ</sup>ふ住<sup>ス</sup>て仕<sup>シ</sup>奉<sup>ホウ</sup>るむが。後<sup>ノチ</sup>よ左<sup>サ</sup>京<sup>キョウ</sup>よも。和<sup>ワ</sup>泉<sup>セン</sup>

因ふも移住<sup>レ</sup>し故<sup>レ</sup>ふ。負<sup>ル</sup>氏あると疑<sup>ハ</sup>ふ。師も既く  
姓氏録よ  
畝尾連と云姓のあるを此地と  
出<sup>ル</sup>むむせばうりハ言まき。然<sup>レ</sup>も派<sup>ハ</sup>の原<sup>ハ</sup>を異<sup>ニ</sup>  
して。同姓あるも數<sup>ハ</sup>有<sup>レ</sup>れ。此<sup>ハ</sup>を別<sup>ニ</sup>姓<sup>ト</sup>ふやと思<sup>ハ</sup>ふ  
有<sup>ル</sup>む。けむぞ居<sup>ル</sup>登<sup>ル</sup>魂<sup>命</sup>。兒屋<sup>命</sup>。共<sup>ニ</sup>辭<sup>代</sup>と云<sup>ハ</sup>名<sup>を</sup>も  
負<sup>給</sup>むむと。事<sup>蹟</sup>ふ熟<sup>符</sup>へまむ。疑<sup>ハ</sup>く所<sup>念</sup>とゆ。其  
は辭<sup>代</sup>の辭<sup>ハ</sup>正<sup>字</sup>。代<sup>ハ</sup>借<sup>字</sup>れる。驗<sup>の</sup>省<sup>言</sup>ふて。そを  
言<sup>ハ</sup>ふ驗<sup>ある</sup>神<sup>等</sup>あまむあり。あるし。志<sup>ハ</sup>し  
同<sup>言</sup>ある由  
む。いちしろあとも云<sup>ハ</sup>て  
知<sup>ベ</sup>し。所<sup>知</sup>看<sup>を</sup>を。あろし看<sup>と</sup>いふ。ま<sup>と</sup>白<sup>も</sup>同<sup>言</sup>れり。ま  
と若<sup>く</sup>む。辭<sup>代</sup>と。事<sup>知</sup>の義<sup>よ</sup>て。必<sup>有</sup>らむ。ま<sup>と</sup>大<sup>因</sup>  
主<sup>神</sup>の御<sup>子</sup>の言<sup>代</sup>主<sup>神</sup>此<sup>言</sup>代<sup>も</sup>此<sup>の</sup>辭<sup>代</sup>と。語<sup>を</sup>同<sup>レ</sup>  
れと。負<sup>坐</sup>る由<sup>緒</sup>を異<sup>あり</sup>。彼<sup>御</sup>名<sup>此</sup>處<sup>ふ</sup>云<sup>を</sup>合<sup>せ</sup>考<sup>ふ</sup>  
可<sup>し</sup>。御<sup>父</sup>子<sup>を</sup>。天<sup>と</sup>因<sup>や</sup>ふ別<sup>て</sup>稱<sup>せ</sup>る。居<sup>ル</sup>登<sup>ル</sup>魂<sup>命</sup>は。天

ふ神<sup>留</sup>坐<sup>して</sup>。言<sup>靈</sup>此<sup>原</sup>を知<sup>坐</sup>せむ。天<sup>と</sup>稱<sup>し</sup>。兒屋<sup>命</sup>。  
此<sup>因</sup>よ天<sup>降</sup>坐<sup>し</sup>。天<sup>言</sup>靈<sup>の</sup>幸<sup>ふ</sup>依<sup>て</sup>。其<sup>職</sup>ふ仕<sup>奉</sup>給<sup>ふ</sup>  
故<sup>ふ</sup>。因<sup>と</sup>稱<sup>して</sup>。同<sup>名</sup>を負<sup>給</sup>へ<sup>と</sup>知<sup>れ</sup>と<sup>也</sup>。然<sup>れ</sup>む此  
の天<sup>因</sup>ハ  
実<sup>語</sup>あり。故<sup>天</sup>をア<sup>メ</sup>と訓<sup>る</sup>あり。諸<sup>ま</sup>多<sup>姓</sup>氏<sup>録</sup>右<sup>京</sup>天<sup>神</sup>  
部<sup>よ</sup>伊<sup>與</sup>部<sup>高</sup>媚<sup>牟</sup>須<sup>比</sup>命<sup>三</sup>世<sup>孫</sup>天<sup>辭</sup>代<sup>主</sup>命<sup>之</sup>後<sup>也</sup>  
とある。辭<sup>代</sup>主<sup>命</sup>も天<sup>神</sup>也<sup>有</sup>まむ。居<sup>ル</sup>登<sup>ル</sup>魂<sup>命</sup>あること  
ある。前<sup>の</sup>成<sup>文</sup>ハ。此<sup>ふ</sup>依<sup>て</sup>主<sup>字</sup>を補<sup>と</sup>す。し<sup>る</sup>ぞ思<sup>ふ</sup>  
旨<sup>あり</sup>て。今<sup>主</sup>字<sup>あ</sup>き方<sup>は</sup>依<sup>て</sup>。高<sup>媚</sup>牟<sup>須</sup>比<sup>命</sup>  
命<sup>ふ</sup>出<sup>自</sup>を係<sup>と</sup>る。泥<sup>む</sup>べ<sup>ら</sup>ぬ<sup>し</sup>を。開<sup>題</sup>記<sup>。姓</sup>氏<sup>録</sup>  
論<sup>の</sup>處<sup>よ</sup>。委<sup>諸</sup>か<sup>く</sup>思<sup>ひ</sup>集<sup>約</sup>立<sup>返</sup>め<sup>て</sup>。其<sup>御</sup>祖<sup>神</sup>とち  
此事<sup>を</sup>思<sup>ふ</sup>。津<sup>速</sup>産<sup>靈</sup>神<sup>と</sup>申<sup>は</sup>。疑<sup>ハ</sup>く火<sup>産</sup>靈<sup>神</sup>ふ  
ぞ御<sup>坐</sup>る。依<sup>其</sup>ま<sup>於</sup>津<sup>速</sup>也<sup>。伊</sup>都<sup>速</sup>の伊<sup>を</sup>省<sup>け</sup>る<sup>了</sup>  
て。伊<sup>知</sup>速<sup>の</sup>伊<sup>を</sup>省<sup>死</sup>て。千<sup>早</sup>と云<sup>ふ</sup>同<sup>レ</sup>れ<sup>む</sup>。伊<sup>知</sup>速<sup>き</sup>

方スレ。御靈ミタマ此卓スレとる由の御名ミナ也。伊都速伊知速同きこ  
都波夜と云ことも第百六段道ミチ天上アメお坐イハは神等カミナリ此中ココお  
速振ハヤビの処トコロお委マカく註ツケを見るべし。天上アメお坐イハは神等カミナリ此中ココお  
そ此伊都速ぶる神カミを火神ヒノカミをおきて誰タレ神カミ有らむ。彼神  
を祭マツルる詞コトバお。御心ミココロ一速イチハヤ比給ヒタマ波志止ハヒトシ爲シ氏ウヂ云イハくと有アるを思  
ふべし。此神伊邪那岐命イサナハヒメノミコトお斬キられ給タマひしうぞ。其御體ミカサを  
天上アメお上ノボすて香山カミヤマと化ナまるおと。上ノボ五段イハお云イハる如ごとくお  
れば。其御靈ミタマのやぐて彼山カミヤマお坐イハまゑて。市千魂イチチノミ命ノミコト。武乳速  
命タケノミハ。其御靈ミタマ此御子ミコお坐イハお依ヨ可シ。神武天皇カムヤマトノミコト卷マクお記シせる。  
丹塗矢ニニツヤお化ナて建角見命タケツクミノミコトの小女玉コメ依ヨ毘賣ヒメを肝し。故ユ古コ此  
て鴨若雷命カモニガヒメノミコトを生坐イハる故事コトバをも思オモひ合アはべし。故ユ古コ此  
二命ニノミコト此御名ミナも共ともお親神ミヤコトの御名ミナと同義トウギおて。市千イチチノミ此市チノミを。

伊知速の伊知よて。伊都と云も同く。千は比古遲の遲と  
同く。男神を稱ナヅケゑるお也。まゝ武乳速の乳速を。伊知速の  
伊を畧シ死シ稱號ナヅケの武を冠カ冠て云イハ依ヨふて。二柱共ニツチトモお。親神ミヤコト此御  
名ミナお由ヨゐるおと如此カクゴトし。然シカドれど津速産靈ツヤハタマ神ノカミと申イハはる。火  
あること更さらお。ちて津速産靈ツヤハタマ神ノカミ。市千魂イチチノミ命ノミコト。興台産靈キウダイハタマ命ノミコトと。  
次つぎくお。火産靈ヒノハタマ此功業イサヤ成ナりて。兒屋根命コノネノミコトお至イて。思慮オモヒカガの  
智チ全ゼンく整トひ。石屋戸隱イシヤドカクレの大禍事オホノコト直ナし給タマへる功イサヤの。高タカく  
比類ヒタビおきこと。幽フカ死シ因ヨシある事コトあり也。まゝ此神カミ此神カミ彼  
謀マカ成ナべき所由トコロヨリを矢ヤく所知シ食クハまゑて。令ミコト思オモはる。禍事コトを直ナし事  
る。皇産靈ミコト神ノカミの御量ミチカをいっお太オホじき物モノおらる。其カミを彼  
招事フキワザお用ヨウふる物を。悉シツく香山カミヤマをり取トルれる所以ソノカを。まお熟シユク



思ふべし。抑、火産靈神は。上第十五段。小云る如く。其御母伊邪那美命の已命を生給するをり事起りて。豫母都囿小往坐し。其事小依て。已命を殺さえ給ひし故小。彼囿を惡み給ふ所由ハレあまむ。彼處小屬る事物をば。甚く惡キひ坐て。矢く彼囿小却ヤひてむと。稜威速ハヤび給ふ御靈ミは盛ミなる故小。その御靈ミは頼ヨて。彼罪穢の大禍事を却ひ失ナむとて。彼神ミは御體ミカネの化ナれる香山々ミ。招事ミは物を採れる小ぞ有ル。後世ノチまでも神事ミコトノコトは火を清むることヲを穢ケガレありてモ。却シテて火ノ神の御荒ミコトノびハるを恐オソまてモ。あリてモ忌清イハヒむべシ。物ノ穢ケガレあらむことを恐オソれて火ヲを燃ヒくル事ヲ其清スき御靈ミは頼ヨて清スむルをモて此ノ故事ミコトノコトは熟マく符シ也。此ノ因縁イハレを思ヒ慮シて。知リ給ヘてシ兒屋根命ミは彼神ミの

御齋ミある小熟符マひて。甚も妙ある事ありシ。心ヲを平ナふルふべし。熟マ考シふル。其思慮シめて始給へる神事ミコトノコトは中ノ太ヒ非ヒの事ハしも神の御心ミコトノココロを問奉る。あリてモれハ重シ神事ミコトノコトあるルあリて。今更ニいふ迄ヲれキを。其事ミコトノコトは鹿カの肩骨カガを灼ヤて。ト合ヒてとシ。始給ヘるルを思ヒふル。抑シ。獸ケモノは多クかル中ノ。此ノ獸ケモノはシ也。火産靈神ヒノウミは御骸ミカラダ小成坐ニる。大山祇神オホヤマヒメノカミの御末ミコトノシノよテ。獸ケモノの祖ムネあるルを。此事ミコトノコト第十六段ノ。肩カガ小奇靈キレキき骨ハネありて。其ノを波ナミ波ナミ迦カもテ灼ヤとシて。無カ上ノ至尊タツ也。大御神オホミコトは御心ミコトノココロをさシ予ハ。窺ウカガ測ハカて奉ルべき事ノの因ヨシを辨サト予ハ智チて坐スるル也。奇靈キレキある御智チは中ノ。必ズとも妙ある思兼シあるルをヤ斯クて此ノ御功ミコトノイサナ小シ

ゆて。擲眞智命と云ふ御名をさす。予不負坐し。大和、国の香山、第百四十五段、云如く、深き由ありて、天上ある香山を降し給へる山ありを此地に擲眞智命の御社あり給ふことハ、火神の御齋、依りて、此、固まても、彼、処に祭給へるおほい、猶委く、神武天皇、卷、神事、此、宗源を掌して、神と君との御中、執持、ち、政事、奏し給ひ、御齋の次、其業を仕奉れると。上、おほ下、おも、註せる如く、おほ、最も、太じ、死御功業、おほ、巴。何はれ道を学び古の趣を伺ひ世に傳へむと勤しむ。徒に常、津速産靈、神をり、次、兒屋、命に至るまでの神、此、由を、とく思ふべき、おと、祈、白、おほ、べき、かくて、又、世、お物、知、と、謂、ふ、稱、の、有、る、其、義、を、辨、ふ、可、し、其、を、万、物、此、然、る、所、以、の、原、を、辨、知、と、る、者、を、稱、へ、云、お、抑、く、物、知、と、云、こ、と、今、を、現、お、見、お、る、小、事、と、く、思、お、る、

を辨へる、おほ、おほ、か、巴の人をも言ふと。古、を、然らば、神道の原を知て、太、お、此、事を明、お、と、る、人、を、云、事、を、聞、え、と、巴。其、を、物、知、人、て、お、言、お、。始、て、物、お、見、お、る、を、龍田、風、神、祭、の、祝、詞、お、。天下、乃、お、お、公民、乃、お、お、作、物、乎、草、乃、お、お、片、葉、爾、至、お、お、万、氏、不、お、お、成一、お、お、年、二、年、爾、不、お、お、在、歳、眞、尼、久、傷、故、爾、百、能、物、知、人、等、乃、お、お、。上、事、爾、出、牟、神、乃、御、心、者、此、神、止、白、止、お、お、負、賜、支、此、乎、物、知、人、等、乃、お、お、。上、事、乎、以、お、お、氏、お、お、止、母、出、留、神、乃、御、心、母、無、止、白、と、お、お、あるを、熟、思、お、お、。此、全文の意、を、崇、神、天、皇、卷、の、本、文、お、。物、知、人、とは、太、お、お、。此、の、上、事、を、行、ふ、人、を、云、稱、お、お、お、。依、こ、と、明、お、お、お、。凡、て、物、を、云、お、お、。稱、お、お、お、。萬、お、お、お、。泛、く、お、お、。と、お、お、。依、中、お、お、お、。神、を、指、て、言、お、お、お、。と、多、し、其、を、

ま於御門祭祝詞。如湯津磐村久塞坐氏。四方四角與利。疎備荒備來武。天能麻我都比登云神乃云。自上往波上平護利。自下往波下平護利とある。此同事を。祈年祭祝詞。湯津磐村能如塞座氏云。疎夫留物能。自下往者下平守。自上往者上平守と云ひ。道饗祭祝詞。根固底固與利。鹿備疎備來物爾云。下行者下平守理。上往者上平守理。と云るを對へ思ふべし。御門祭祝詞。神と云へるを。祈年道饗祝詞。物と云るをや。まに神代紀。葦原中固之邪鬼とある邪鬼を。私記。安之岐毛乃と訓み。中昔。毛乃。氣あぞ云る物の意字思ふべし。まに物忌物狂ひ物の所為あどの

物俗子憑物乃為とある。此を神と云ふ同。泛く言る語と云ふ物も。これ其是。て。あるを以て。物知と云は。神の所為。此幽。て著のらぬを。知辨ふる由の稱ある。てを曉べし。はと志留といふ言。此本も。漢文。著明。明白。灼然。あど書る。残志留斯も。伊知士留斯とも訓む。志留と同く。伊知士留志の伊知。ち速く志依。由。後。幽。ま。とる事を著く。志依。由。此言。み。於。白も。同。言。れ。は。あ。と。第。五。十。八。段。此。も。と。太。非。事。を。為。て。其。火。炳。此。非。子。依。幽。事。を。知。り。出。と。る。言。あ。る。は。し。ま。と。印。驗。祥。あ。ど。の。字。を。志。留。斯。と。訓。む。も。同。言。あ。り。か。く。考。牙。集。免。了。天。辭。代。命。を。居。く。登。魂。命。此。別。名。固。辭。代。命。と。て。兒。屋。命。此。別。名。あ

はべく。辭代とて。其御言ふ。悉く去依し有る由の稱名。う  
於物知と云ふ言も。此神を正始とて。神祇此情狀を伺ひ  
知まる人を稱あり。とは云ふ。あらず上ふ言ふ處立。○玉  
主命は。度會延經が神名式考證ふ。土佐、國吾川郡。天石門  
別安國玉主神社。此神社の事、第五十七段。石戸別命此處に注りき。とある即是  
あてと云ゆ。まを信ふ然る説ふて。此を石戸別命の別名  
ふれも有る依。其をまお式子。此社ふ並びて。朝倉神社と  
云あり。但し郡は土佐、郡ふて鄰あり。是祭神を。當國風土記に。天津羽々  
神と申て。天石門別神の子ある由見と也。此全文を、第百  
神の處に引て、委く云べし。此ふ據て。按ふ。天石門別安國玉主神社を。

石門別命ふ坐はこと疑なく。そ此天津羽々神の坐は。朝  
倉社と竝坐まを。御父子の縁あるを。下ふ註せる如  
く。遠江、國佐野郡。已等乃麻知神社。阿波、阿波、神やが  
て天津羽々神あて、其由も、第百三十一段ふ云ふべし。と竝坐はこを。御兄弟の縁  
あ依まをを思ひ合せて。玉主命を申まを。石戸別命此別  
名れること。我徴し辨ふはし。あず第五十七段に注る説  
どもを合せ見て、とく思ひ  
辨へちて玉主を申ま名義を。いまご思ひ得る。万葉四ふ  
玉主を夕一モリと訓るまと有。ふ據を。此もまの訓べ  
きうとも思ふぞ。然訓べき事由をも思ひ得る。姑く字  
のほくふ。多麻努志を訓也。○許登能麻智比賣命。名義許

登之。己く登魂命の己く登ふ同也。麻智之。櫛眞智命此眞  
 智ふて。其之麻邇と云ふ同也。死事。上ふ云るが如し。前ふ  
 名を疑ひ思へし。凡て神ふまれ人ふゆれ。女男あら  
 びて。同義の名を負る例を思ふ。伊邪那。伊邪那美。秋  
 津日子。秋津比賣。足名。推手名。推玉。依毘古玉。依毘賣。菟狹  
 津比古。菟狹津比賣。おどのとぐひ。皆同也。脈あるを此神  
 と居く。登魂命と云ふ本より其脈異あるが夫婦と成坐る  
 ありふ。同義の名を負るむいふらしと思へし。うど。後  
 り熟思へむ。脈異あるが夫婦と成坐るも。同義の名を負  
 依例に。阿蘇都彦。阿蘇都媛。おぜのとぐひも。あり。然れば  
 此ハ疑ふべき事。ちて此神此事は。神名式了。遠江。因佐野  
 郡。己等乃麻知神社ある也。此比賣神ある也。今日坂  
 の方。宮村と云ふ在て。菅田八幡宮と称はせ。まとい。一説  
 了。挂川。此海道筋の裏町ある。小社ありとも。ほある。太  
 仙寺村ある。諏訪社を云とも云り。何を是む。詳あらば  
 能尋ぬべし。○まとい。後。彼。因。人。ふ。問。ふ。挂。川。の。裏。れ。る。小

社ある地を。今龜甲と云ふ。古き地。此は文徳天皇紀ふ。嘉  
 名。う。ト。ふ。由。有。て。お。不。也。云。り。此は文徳天皇紀ふ。嘉  
 祥三年七月。遠江。因任。夏鹿苑。兩神。竝授。從五位下。とある  
 社了。任夏を任夏と云ふ。義ふ作る也。其は麻知を  
 其は十六夜。日記ふ。廿四日。ひ。ゆる。あ。り。て。佐野の中山  
 をこ也。任事とりや云。社のほど。ぬ。道いとおも。あ。ろ。し。山  
 蔭ふて。嵐もおく。ばぬ。あ。れ。云。く。枕草子。神をと云。處ふ。  
 おや。れ。ま。く。の。明。神。い。と。あ。れ。も。あ。さ。の。み。た。く。む。と。ハ  
 いは。ま。給。ハ。む。と。思。ふ。よ。い。を。か。し。ほ。と。相。摸。家。集。ふ。そ  
 ぞ。う。け。て。頼。み。し。か。ぞ。も。東。路。乃。こ。や。れ。ま。く。ふ。を。あ。ら。ざ  
 ぞ。あ。り。る。ま。と。名。寄。ふ。鴨。長。明。ま。と。未。來。む。我。が。祿。ぎ。こ  
 と。の。あ。ら。ざ。ば。も。ち。ら。げ。あ。木。の。も

みぢ葉光行紀行ふおとのまくと聞ゆる社おとしまは  
よめふおまきうけてぞあむいも思ふことのはあ  
る神のあふしを貞應海道記よ山口といふ今宿を過ま  
む道に舊きふとゆて云く事の任をまをひ社ふ参詣は  
おもふ事ははくよ叶へむ杉ゑる神のちうひの志依  
しとぞ見む鳥丸光廣卿嗜記ふこと此まは社ふてみ  
あめおハ神ふまうせてひとまぢよ我思ふこと此ま  
ふ祈らむ入坂を越むと天五六町ぞうにあふとよむ八  
幡宮あり鳥居は梅咲の正然云くと有り此を按ふ大  
仙寺村の諏訪明神戎をしりける者のあてて事任の社  
とし給ふれらむそを入坂を越むとて云くとあるよ  
然を知らるありまよ冷泉院為久卿道言ふ大井川け  
ふのこよせをさして思ふあど何るを思ふはし然まど  
あといはふふと祈る神垣

ぬ布己等乃麻知とも申せ正を見え。清和天皇紀ふ貞  
觀二年正月授遠江国從五位上眞知神正五位上とある  
は。決く此神あるを本の御名此己等乃麻知と申せる己

等を省死て眞知神と唱とるれ也。嘉祥三年七月ふ從五  
位下を授られとるよ

此ふ引る貞觀二年の文ふ從五位上とあるを以前より上  
位を授られとる史より洩とるうまよ上ハ下の誤ふて  
も有べし此差誤を史どもちて嘉祥三年ふ此神と並ふ  
ふをり見ふる例あり

神位を授られし鹿苑神社を式ふ磐田郡よ鹿苑神社を何  
る是あるべし。今二宮村と云よ在て鹿苑を鹿トふ由あ  
る是あるべし。鹿苑大明神と云よを鹿苑を鹿トふ由あ

て所思也。其在鹿苑字の如く。上事此料の鹿を飼とる  
野あらむ。武藏国乃武藏野も古は上術安ると死此料

の鹿を飼へる處と云也。和名抄豊島郡ふ占方。此武藏ふ  
も。大麻止乃豆乃天神社何也。園神社園韓神事代主神兩

神所祭之也とあるを実ある事代主神を祭ると云ふ  
を由あり。其を大國主神の御子の事代主ふを非安上ふ

云、兒屋根命の別名、辞代命あるべし。嘉祥三年、小任、鹿苑、同時、小神位を授られしも、由、有ることあり。さて、園、韓、神と云ふ、更、小由、あし、此、鹿苑の苑、云、小あきて、後、人の推當、あるべし、殊、小園、韓、神、事、代、主、神、兩、神、と云ひ、て、園、神、韓、神、を、中、昔、と、り、連、け、て、園、韓、神、と云を、ちて己等一、神、此、名、と、心、得、誤、と、る、人、の、記、せ、る、あ、る、を、乃麻知神社小竝て。式小阿波、神社有る之を、阿波、園、風土記、よ、空、と、ソラ下、ふ、り、降、と、る、山、此、大、キあ、ハ阿波、園、小ふ、り、降、と、る、を、天、詔、戸、山、と、い、ひ、其、山、の、碎、タり、て、大、和、了、ぬ、下著、ツキあ、る、哉、天、香、山、と、云、を、何、ハ天、詔、戸、山、は、太、詔、戸、命、の、御、名、小由、何、下て、聞、也る、を、思、ふふ、所、由、何る、こ、と、あら、む、其、由、上、よか、扱く、云、り、あ、下第、百三、十一、段、阿波、神の、處、ま、と第、百四、十五、段、香山、の、天、降、著、る處、よ、委、く云、ふを、見、て辨、ふべし、○中臣連万葉十七歌、小奈加等美と書、下名、義、を

中執持チキあり。登理の理を省ル下、其例、を師の言れし如く、ふて、あ布、多り、下て、さて、母知、て多、言約、下て、美せ、あま、るれ、るこ、と、上第、三十、八段、臣の、尸此、處、小委、く云、りき、合せ、考ふ、べし、師を、臣の、意を、省け、るあり、と云、れし、うど、迂遠、し、ちて、師言、ふ、或人、孝德、紀よ、上、臣下、臣を、云こ、を有、れを、其、よ對、へと、る中、臣あり、又大、臣小、臣よ、對、其由、を、師も、引れ、ると、る稱、あり、あど、云る、もみ、あ非、あり、其由、を、師も、引れ、る。伊勢齋内親王奉入時、宣命、よ見、也。御杖代止進給、タマヒ布御命乎。大中臣茂梓中取持氏、恐美恐美毛申給、久止申、まと延喜奏進、大中臣本系、よ天平寶字五年所進、本系帳、云。高天原初而皇神之御中、皇御孫之御中、執持伊賀志梓、不傾、本末、中良布留人稱之中、臣者、まと中臣壽詞、よ台記、別記、よ見、也。本末不傾、茂槍乃中執持氏、奉仕留中臣云、あど、何

依如く。祖神天兒屋命を正して。神と君との御中を執持  
て。申ひ職ある由ふて。中執持を云ふを約終て。奈加等美  
と云ふ就て。中臣字を書るれ也。其を大持てふ言の約也  
と云ふ同例あり。さて師説は。茂梓云く。中臣字を填  
此真中を首尾を傾け。安正しく平らぐ。執持を以て神と  
君との御中より立て。宜きさは。群卿者。從來如。嚴予取中事  
り。舒明紀の詔も。亦大臣所遣。卿者。從來如。嚴予取中事  
而奏請人等也。とあるも。中臣所遣。卿者。從來如。嚴予取中事  
れ。古言と聞え。とあるも。中臣所遣。卿者。從來如。嚴予取中事  
下言於上。宣上言於下也。あるは。職負令大納言。義解ふ納  
祝詞を掌は。を申ひ。君の御言を神に納め。これみ。太占此  
の職。事。而奉仕。馬とある。如し。信友云。此を以て。卜事  
占。卜事。而奉仕。馬とある。如し。信友云。此を以て。卜事  
を。神事。の宗源。ある由を辨ふ。無らむ。了を諺ふ。云。偏便  
ふて。聖幸ひ。坐。神。此。御。固。とも。非ぬ。を。や。何。あ。う。し。云。偏。便

連シ上五段二十 出とて。ちて師も言れぬる如く。諸の姓  
了。職業を取まると。地名ト小依ま依と。祖名オヤを取ま依と。又  
事を取て。物を取て。おせると。種々ある中。此中臣か  
どは。其職業ウツ小因まる姓あり。信友按。舊中臣と云を。  
あり。ま。と。大中臣と云氏とも。為れる。れり。下。云。る。卜部  
の後。小氏と。おれる。と。同じ。趣あり。故。後。小。も。職。名。よ。違。り  
て。中。臣。壽。詞。は。中。臣。祭。主。正。四。位。上。行。神。祇。大。副。大。中。臣。朝  
臣。清。親。と。見。え。宮。主。祕。事。口。傳。抄。御。躰。御。卜。差。文。書。様。の。処  
小。も。中。臣。正。六。位。上。大。中。臣。朝。臣。實。名。卜。部。正。ち。て。神。武。天  
六。位。上。卜。部。宿。祿。實。名。お。ど。記。由。見。と。り。ち。て。神。武。天  
皇。紀。小。天。種。子。命。と。云。見。了。是。中。臣。氏。之。遠。祖。也。と。あ。り。命。此  
を。天。兒。屋。命。の。孫。よ。て。天。忍。雲。命。の。子。あ。か。く。て。此。史。の。神  
り。忍。雲。命。此。事。を。第。百。四。十。三。段。小。見。也。か。く。て。此。史。の。神  
武。天。皇。卷。小。舉。と。る。宇。佐。津。臣。命。ハ。天。種。子。命。の。子。小。て。兒



屋命三世孫あり。孝安天皇卷小舉とる大御食津臣命を  
四世孫伊香津臣命は五世孫梨迹臣命を六世孫崇神天  
皇卷小舉とる神聞勝命は七世孫垂仁天皇卷小舉とる。  
久志宇賀主命を八世孫大鹿嶋命は九世孫景行天皇卷  
小舉とる臣陝山命は十世孫仲哀天皇卷小舉とる。雷大  
臣命を十一世孫あり。され兒屋命は正統して支別の家  
家いと多う。其不出とる史の卷く小此氏人多く挙とるを  
紀神功皇后紀あどふ中臣鳥賊津連とる中臣を師説  
よ。あそいまど姓よを何らで職を云るうとも聞ゆれど  
も。四人の名を連祢奉とる餘の三人も皆姓を奉とまむ  
此も既よ姓あり本系帳ふを欽明天皇の御世よ常磐大  
連公よ始て中臣連と云姓を賜ふとあれども然ふて非  
じり。さて欽明紀よ中臣連鎌子と云人も見えたり。さて

又後世までも姓のみあらば中臣と云職も けて天武天  
皇紀十三年十一月小中臣連賜姓爲朝臣とあり。但し此  
あり下ふ記せる師説 然まむ是と後を中臣氏の家く。  
を見て思ひ辨ふべし。悉く朝臣の加婆禰とあまらうを思ふ。姓氏録 河内 国  
ふ。中臣連あり。餘書ふも中臣連と云る。彼此見えとま  
ば。あふ本ははくあゆめ多うりしれ。此餘此姓とめ支  
別て。中臣方岳連。中臣酒人連。中臣大田連あどのあむひ。  
中臣某と云姓多く。姓氏録小見とあゆを按ふ。此を各々  
某く小別ある由ありて。負るれるはれど。實は中臣氏  
よて。其職よ仕奉れる故ふ。かく稱來まらあゆ可し。まよ  
中臣

某と云はて直に大家連宮外連殖栗連志悲連おど云へ  
るも多うに此等も委く在中臣某と稱むをまど直ふ  
其連とばりの中も稱へるを其俣に録されたりとおぢ  
悲連と同録の中も稱へる亦中臣大家連中臣宮外連中臣志  
ひ辨ふべし見え餘書に中臣植栗連おど何るを見て思  
云姓のこまじきて天兒屋根命の子孫の外おも中臣某と  
臣氏疑ハれし縁ありしことお師もいふ由も中臣某と  
由ありて中臣の職業を仕奉る家おらぬ思ふも別ある  
仕奉る職ふるも多くまゝと服部の連を天固造の縁ありて紀氏  
別お依る系の人お服部連を賜へおれど例も多うて  
お大抵系脈異しお服部連を賜へおれど例も多うて  
ぞ氏加婆祿を明らむる学問の心得ありて藤原祖と云ひて藤原祖と記  
書紀古語拾遺お屋命を中臣連祖と云ひて藤原祖と記  
書紀古語拾遺お屋命を中臣連祖と云ひて藤原祖と記  
兒屋命の正統と立ざぬありさむり藤原を嫡子別家の盛れる時

お撰れる古事記書紀古語  
拾遺お依る阿那多ふと  
○藤原朝臣おを師説ふ天智  
紀よ八年十月庚申天皇遣東宮大皇弟於藤原内大臣家  
授大織冠與大臣位仍賜姓爲藤原氏自此以後通曰藤原

大臣辛酉藤原内大臣薨と何るおを鎌足公おす  
をも藤原氏を賜へぬ前の文お藤原内大臣家と何る  
を誤りこの上文お中臣内臣と何るぞ宜きさて鎌足  
公ハ系圖お依て考ふるお上は云る雷大臣命の子大橋  
命の子阿麻呂舍御の子阿古大連の子真人大連此子  
賀麻大夫公此子黒田大連の子常磐大連此子可多能子  
大連の第一子御食子大連此子おて姓氏録お兒屋根命  
二連の孫と何るお符也但し世數を數ふるお就て心  
留おくべき事あり其を雷大臣命の兒屋根命十一世孫  
と姓氏録おあるお御子忍雲根命と御孫の天種子命  
を世數おて天孫本紀お世數おど此定ありはと鎌足  
公を二十二世孫とあるお兒屋根命を此定ありはと鎌足

世よ何とる由あり此ををく心を得ざらむと姓氏録  
を讀み疑あゆべきも此ぞ其を彼録もあつ二さま小録  
されされバれり津島直の処其餘も天兒屋根命十四  
世孫雷大臣命とあるも多うは家より數上るありかくて  
悉くを能く心著て餘書せもと校合て其世數を思ひ  
然れバ能く心を著て餘書せもと校合て其世數を思ひ  
定むばきものありおえ此氏に限らば万姓は係る説ぞ  
しけて此時ふ藤原と云を賜へては此人一人はみと  
お布あくて此後も中臣金連ふと云人あり金連を方子  
子連の第一男ふて右大臣なりしを壬申年の乱かくて  
よ近江に御方よて斬れ其子も流されたりき  
天武天皇十三年十一月小中臣連賜姓爲朝臣と見也  
十月朔日お更改諸氏之族姓作ハ色之姓以混天下萬姓  
一曰真人二曰朝臣三曰宿祢四曰忌寸五曰道師六曰臣  
七曰連八曰稻置かくの如く定米られ即其日守山  
公ふと十三氏よ真人此姓を賜ひ其後おぎくお大三

輪公の姓大倭連れど十一氏朝臣の姓大伴連ふと五十氏小宿  
祢の姓大倭連れど十一氏朝臣の姓大伴連ふと五十氏小宿  
訶都槻本村主勝麻呂ふ連此姓を賜ひしこやあど見也  
て道師臣稻置あどの姓を賜ひしことを見え又右の  
八色此餘の姓も此後もあふ多し然れば一ぬびかく定  
免給ひしうとめ全くもあふ多し然れば一ぬびかく定  
あるべしさて右此八色此中み初の五を此と止ぬり以前  
徳無き加婆祢あり但し人を崇て阿曾と云しおとを仁  
平群朝臣穂積朝臣あどと免り美を省るるあり眞人と  
云稱もふるくたり有し免り美を省るるあり眞人と  
瀛眞人とあり宿祢も上代をゆ名も多く見也道師を  
神代紀ふ道主貴開化天皇の御孫よ丹波道主命あり欽  
明天皇紀ふ道主貴開化天皇の御孫よ丹波道主命あり欽  
稱有しふ道師字字填られとありかくの如く何れも  
其稱はもととまり有たきと姓の加婆祢とあまる此  
御世たり始まるとも此加婆祢の姓ハ後まで物お見也  
定免れしうども此加婆祢の姓ハ後まで物お見也  
とるこ此をゆ前ふ中臣連大嶋とあてし人を此後了  
とるこ此をゆ前ふ中臣連大嶋とあてし人を此後了

藤原朝臣大嶋とほまむ。朝臣姓を賜ひし時ふ。此等も藤原ふれまゐるふや。但し持統天皇紀ふた。又中臣大嶋朝臣糠手子連の孫許米の子あり。さて又臣麻呂を持統天皇紀三年此処ふた中臣朝臣と記し。七年の処うた葛原朝臣と記せり。あまらるを以て思ふ。藤原と云は始のちどはあふ。稱号と云物の如く。正しく姓ふも非ざり。む故ふ。あふ中臣朝臣とも云し。あるべし。若然らば。武天皇の御世朝臣此加婆祿を賜る。処よ。加あふ。藤原とも有べき事あるふ。あふ中臣連とのみ有りて。別を以て見え。然るを其時より後。藤原朝臣とも云る。藤原を別号の如くありしと聞ゆ。姓氏録。左京ふ。藤原朝臣。出自津速魂命三世孫。天兒屋根命也。二十二世孫。師のこるふた。二十三世孫とあれど。そを世ふ。印本のほは。引まじし。ふて。誤あり。故。今。信友。技合。とる古本。ふ依て。改免。奉。扱。内大臣大織冠中臣連鎌子。古記曰。天命

開別天皇 諡天 八年。賜藤原氏男正一位。贈太政大臣不比

等。天淳中原瀛真人天皇 諡天 十三年。賜朝臣姓と見えと

武。或人云。鎌子。カ。ス。と訓。ば。し。魚。名。あり。や。云。る。た。餘。こ。ろ。を。か。く。さ。る。た。異。し。き。説。を。云。出。て。学。者。の。耳。を。お。ど。ろ。う。に。倫。多。し。也。先。惑。を。さ。ゆ。あ。と。勿。ま。さ。て。天。武。天。皇。此。御。世。ふ。朝。臣。の。加。婆。祿。を。賜。る。は。中。臣。連。あ。は。了。藤。原。れ。む。不。比。等。公。も。正。し。き。姓。を。あ。ふ。中。臣。れ。り。は。了。藤。原。は。大。和。国。高。市。郡。ふ。在。る。地。名。あ。り。卷。十。一。年。定。藤。原。部。と。ある。処。よ。委。藤。原。系。圖。よ。藤。原。地。名。在。大。和。国。鎌。足。之。所。住。く。云。べ。し。

也。と。い。ふ。ま。と。扶。桑。畧。記。ふ。鎌。足。公。の。事。を。云。る。処。ふ。其。家。郡。人。也。其。姓。自。天。兒。屋。根。命。世。掌。天。地。之。祭。相。知。人。神。之。間。仍。命。其。氏。曰。中。臣。美。氣。古。卿。之。長。子。也。母。曰。大。伴。夫。人。と。ほ。ゆ。相。知。人。神。之。間。と。云。う。の。謂。也。御。中。取。持。於。由。あり。但。し。右。家。傳。の。文。扶。桑。畧。記。印。本。ふ。あ。る。処。少。う。畧。れ。り。今。

古本仍り訂正して引於て日本世紀  
内大臣春秋五十碑曰五十有六とあり  
と云姓を其居地の名に據れるをやれり  
以はくさく藤原此地名ふとれる事あり  
説ふ續紀ふ阿曾美と書る處あり吾兄臣此意あり然る  
ま。上り引る天武天皇紀十三年此文ふ朝臣と書るを阿  
佐意美の訓を借れるにみふて更ふ此字の義ふは非  
さて後世ふこまを何そんと唱但し此字をしも當らま  
ゆるふは朝廷此臣と云意を合はれと依事も有はし  
後漢書注獨斷曰公卿侍中尚書衣阜而入朝者曰朝臣諸  
營校尉將大夫以下不為朝臣あど何るふ效ひて朝臣と  
書くことお定免給ひしあるべし故後世ふ此くは祗  
自りら等死やうふもれりと依あるべしあ不記傳三十

七卷廿九丁。○大中臣朝臣姓氏錄左京天神ふ。大中臣朝臣藤  
原朝臣同祖とあり師云文武紀二年八月詔ふ藤原朝臣  
所賜之姓宜令其子不比等承之但意美麻呂等者縁供神  
事宜復舊姓焉舊姓とて中臣をいふ宜復舊姓とあり中  
臣とて云ざりしあるべしさて此段の初に引る延喜奏  
進中臣系図解状ふ加以此氏供奉神事良有以矣苟非其  
人恐致咎崇と云て下ふ此文武天皇紀文を引て以是按  
之復舊良有以矣何者天平宝字五年所進本系帳云高天  
原初而皇神之御中皇御孫之御中執持伊賀志梓不傾本  
末中良布留人稱之中臣者復舊之由惟其義也と云るを  
此の思ひ合せて中臣の神に供奉る神護景雲二年六月  
詔ふ因神語有言大中臣而中臣朝臣清麻呂兩度任神祇  
官供奉無失是以賜姓大中臣朝臣と見えとあり此は神語  
とあり

大祓詞あり。さて系図に依て考ふる。小兒屋命より二十世  
中臣可多能祢大連の子三人有て長を御食子大連と云  
此に鎌足公の父あり。第二子を匡子大連と云ふ。意美麻  
呂は匡子大連の第二男。清麻呂はその第七男あり。  
かゝるまは藤原家の兄の系脈。大中臣家の弟の系脈なり。  
臣清麻呂薨曾祖匡子小治田朝小徳冠父意美麻呂中納  
言正四位上清麻呂天平末授從五位下補神祇大副云々。  
神護元年仲滿平後加勳四等同年十一月為神祇伯景雲  
二年拜中納言優詔賜姓大中臣寶龜二年拜右大臣授從  
二位尋加正二位清麻呂歷事數朝為匡舊老云々。今上即  
位重乞躰骨詔許之薨時八十七と見也。師の引れとる文  
ふ。兩度任神祇官とある。天平末ふ補神祇大副とある  
と。神護元年十一月為神祇伯とある。依を云ふはあべし。  
按ふもと唯中臣あり。是と云此人の子孫を大中臣  
しを此時大字を加ふる。○津嶋直  
朝臣ハ也。あふ次くふ支別とる家此多うる。○津嶋直  
は姓氏録。天授津嶋。○津嶋朝臣津速魂命三世孫。天兒屋根

命之後也と見え。其雜姓中ふも津嶋直天兒屋根命十四  
世孫。雷大臣命之後也とある。よ依て記せ。この十四世  
より數へるとあはれこや。上りて此姓の起は決く出自は  
ふ委く辨すおける。如く。居地を氏とせるハ也。其をま  
對馬國とめ出と依族ふて。居地を氏とせるハ也。其をま  
抄光仁天皇紀。天應元年。柴原勝子公が上言ふ。子公等  
先祖伊賀都臣。是中臣遠祖。天御中主命二十二世之孫。此  
其出自を天御中主命に係るとる由を。此段の初論へる  
が如し。まこと此二十二世之孫とある。舊事紀に撰て造  
れる。後の系図に合せ見れば。世數此符ふ。以て彼系圖  
どめふ見えとる。津速魂命より以前の。妄作神名を信  
る人もあれど。彼を此に符。意美佐夜麻之子也。伊賀都臣  
べく造まるものあるや。神功皇后御世使百濟使娶彼土女生一男名曰日本大臣。

遙尋本系歸聖朝時賜美濃國柴原地以居とあるを顯宗  
天皇紀三年の處に日神月神の御誨に依て高皇產靈神  
に御田を獻じ給ひ壹伎縣主先祖押見宿禰と云ふ對馬  
下縣直と云ふ祠らし給へる此事顯宗天皇卷  
委云べしまに神  
名式に對馬嶋下縣郡に雷命神社能理刀神社ありて上  
縣郡に太祝詞神社のありあを思ひ合はるに雷大臣  
命神功皇后の御世百濟國に御使に行れ多し其子  
孫對馬國にも遺り逗して對馬縣直とあるを依る津島直  
氏に就  
てを混ハしき事あり其をまに古事記に建比良島命を  
津島縣直祖と稱す此は他書に見ざる傳あり彼島  
の社にもよも地名も更由りけり依事ありれ  
む決然て誤れる傳あるべくわがまに國造本紀に津

島縣直檀原朝高魂等五世孫建弥己に命改爲直とあれ  
ど是亦いとわがわがあき傳あり少くも思ひ合ふべき  
事あり建弥己に命と云ふ更考ふべき便あり顯宗天皇  
きた此も決て紛ひとる傳ありはくわがも  
御世あどを記す前サキに其氏人の別記して大和國に住りむ  
故に其に高皇產靈神を祭ち給へるあるはくまに津  
國にも移住しむ姓氏錄に載られと依津嶋直津嶋朝  
臣あるはくかくて津國にて其故事を尋ぬるに神宮雜  
例集に聖武天皇天平十二年四月五日春日御社奉遷壽  
久山御社是右大臣大中臣清万呂卿致仕簞居攝津  
國島下郡寿久郷之間住家近所奉崇也との  
る此に春日御社は清麻呂公の氏神あり故に此由下  
委云ふ  
し其家の近邊にも祀せむとて春日社の御靈を分け遷

あるにて。其を壽久山、御社ヲ併ハせ祭られしを。決て由何  
依事とぞ所思とる。其を此、壽久山、御社と申出ハ。式小島  
下郡よ。天石門別神社。須久、神社二座。阿爲神社と竝載  
られとる。須久、神社是也。朝野群載ハ天永三年撰津  
郷あり。此社を、今宿久、註カク竝トる小就て按ふ。須久  
鳥羽村と云よ在とぞ。  
久社を。元來モトヨリ兒屋根命を祭れる社を依故よ。清万呂公の。  
此處小住れしと。春日神を相殿小併祭られとる。其  
非じ。其を此竝坐る天石門別神を。上よ云依如く。兒屋  
根命の外祖父ニハカタオホジ小坐ませむ縁何也。ま阿爲神社を。姓氏  
録津別國小中臣藍連雷大臣命十三世孫。大江臣之後也と

何るを思ふ。雷大臣命を祭れるからむと所思とゆ。其  
を阿爲神社の在マ地を雄略天皇紀。三嶋郡藍原アキハラ和名抄  
小島下郡安威阿と何る地よ。縁あまむ也。即今も安  
よ在て。日苗森明神也。帳考小云。まと陵式。小島上  
郡三島藍野陵。ま元亨釈書。攝州藍原山と云も見え  
と。り。○因小試ハ云藍原といふ地を。決然て藍ハ由何る  
地名と。お不ハる小就て考る。藍連と云。姓を此地。藍  
を殖と。お不ハる。故。負ハる。姓。あらむ。ま。其。藍。は。吳。藍。を。百  
べし。そ。を。姓。氏。録。小。吳。公。雷。大。臣。命。之。後。也。と。あ。ま。む。彼。百  
濟。國。小。渡。ら。せ。る。時。小。吳。藍。を。取。歸。ら。れ。し。功。あ。ど。小。依。て。  
其。子。孫。小。吳。公。藍。連。あ。ど。の。姓。多。賜。へ。る。ま。を。何。ら。む。と。  
お。不。也。れ。む。お。り。孝。德。天。皇。紀。白。雉。五。年。七。月。西。海。使。吉。士  
長。丹。賜。姓。為。吳。士。と。見。え。と。る。を。彼。處。よ。り。參。來。れ。る。人。小  
賜。へ。る。あり。此。を。彼。處。より。歸。れ。る。あ。れ。む。然。る。由。小。て。ま  
吳。氏。を。賜。ひ。ら。む。と。さ。ま。と。此。は。い。と。未。し。き。考。れ。り。ま  
と。同。抄。小。嶋。上。郡。及。武。庫。郡。小。兒。屋。也。古。郷。也。云。ある。も。由。何



内げれ也。信友云朝野群載十小撰津、因島上、郡兒屋、郷と  
年中當宮、院宣云撰津、因小屋、小林、庄と、祓殿、辻、條、云、養和  
あるを、島上、の兒屋、武庫、郡の兒屋、はと、百濟、郡も、雷  
命、比、彼、因、不行、れ、し、小、由、あ、り、て、お、ぢ、也。まゑ、東、生、郡、小、酒  
氏、録、よ、中、臣、酒、人、宿、祓、天、兒、屋、根、命、十、世、孫、臣、狹、山、命、之、後、  
也、と、ある、小、由、あり、げ、小、聞、え、式、小、島、下、郡、小、大、田、神、社、あ  
る、を、中、臣、大、田、連、ち、て、神、宮、雜、例、集、此、右、よ、引、依、文、の、次、小、  
小、由、あり、げ、あ、り、ち、て、神、宮、雜、例、集、此、右、よ、引、依、文、の、次、小、  
孝謙天皇、天平勝寶八年三月十一日、春日、御社、奉、祭、鎮、於  
伊勢、因、度、會、郡、津、嶋、崎、也。是、宮、司、從、五、位、下、津、島、と、ある、を、  
右の須久、神、社、小、并、祭、れ、る、春、日、御、社、を、伊、勢、大、宮、司、津  
嶋、朝、臣、子、松、が、申、請、て、伊、勢、度、會、郡、小、遷、と、る、由、あ、り、然、れ、  
久、社、の、相、殿、小、坐、し、た、を、其、を、御、託、宣、の、有、し、小、依、て、申、  
拔、り、小、十、六、年、に、聞、あり、

請、ふ、ふ、や。さ、る、例、を、いと、多、り、也、か、く、て、其、遷、祭、れ、る、地、を、  
津、嶋、崎、と、云、を、津、嶋、氏、の、拜、祭、れ、る、社、の、在、る、地  
あ、れ、ぞ、れ、ち、て、右、の、次、文、小、桓、武、天、皇、延、曆、十、六、年、八、月、三  
依、べ、し、  
日、官、符、移、立、離、宮、院、於、度、會、郡、湯、田、郷、之、時、件、社、神、名、式、官  
れ、あ、り、と、考、自、津、嶋、崎、奉、遷、鎮、彼、院、西、方、也、于、時、祭、主、參、議  
證、小、見、也、祇、伯、大、中、臣、朝、臣、諸、魚、宮、司、正、少、有、也、大、中、臣、諸、魚、を、清、麻  
祇、伯、大、中、臣、朝、臣、諸、魚、宮、司、正、少、有、也、呂、四、男、あり、延、曆、十  
六、位、上、中、臣、朝、臣、眞、魚、等、也、此、を、彼、津、嶋、崎、小、遷、  
六、年、二、月、廿、一、日、薨、五、十、一、と、系、圖、に、奉、れ、る、社、を、再、湯、田、郷、離、宮、院、西、方、小、遷、鎮、祭、と、る、由、り、て、  
あり、此、小、八、月、云、と、ある、小、合、ハ、あ、ま、ま、と、由、縁、あり、て、所、思、と、也、其、を、大、神、宮、式、  
奉、れ、る、社、を、再、湯、田、郷、離、宮、院、西、方、小、遷、鎮、祭、と、る、由、り、て、  
あ、ま、ま、と、由、縁、あり、て、所、思、と、也、其、を、大、神、宮、式、大、神、宮、の  
四、座、小、湯、田、社、と、ある、祭、神、を、内、宮、儀、式、小、稱、鳴、雷、震、電、と、所、撰、二、十  
中、此、鳴、雷、神、と、云、は、主、水、司、小、祭、る、神、よ、て、決、く、兒、屋、根、命  
也、此、鳴、雷、神、と、云、は、主、水、司、小、祭、る、神、よ、て、決、く、兒、屋、根、命

の御子。天忍雲根命あるはく所思るを。此由第四百十三段に委く云べし。

此神は坐ひ地小遷せ依て縁有て聞ゆれむあす。信友云。

今も度會郡湯田郷。小俣村ある離宮院の境内小。春日社

あり。小俣村の舊名也。宇羽西村と云り。其を二所大神宮神名略記に。離宮

院坐中臣氏社四座在院西。或云春日社元在度會郡津島。延曆十六年遷此地。四

月十一日上申祭之とあり。まは河内国茨田郡小津嶋部

神社と云も。式小載さまとい。此を津国小鄰き国よて。津

嶋氏小由緒あり神あり依べし。文徳天皇紀小。河内国堤津島女神とあり。も同神よて。

女を部の借字あり。依し。云す。伊豆十部の処に注。○壹岐直よ

て姓氏録右京天神小壹岐直天兒屋根命九世孫雷大臣之後

也。とあり小依て記せす。九世を津国生田首條よもか。此

氏人の物よ見よ依ま。古くは應神天皇紀小。壹岐直眞

根子と云人見え。一本直の下。小祖字あり。上小云る顯宗天皇紀小。壹

岐縣主先祖押見宿禰といふ人よ。高皇產靈神を祠らし

免給するよと。はよ万葉十五小。壹岐嶋雪連宅満と云人

見えよ依れぞあり。雪を即壹岐あり。和名抄小。壹岐島由岐とあり。此国のおとを第八段小委

く注へ。あや次く小註を見て思ひ辨ふべし。○四国ウラベ卜部

卜部と云。天兒屋根命は傳へ給する卜術を傳ハすよる

氏人の卜事もて奉仕る部を云る稱あり。其部の族は

氏とせよを。後小加婆禰子賜へ依れす。其趣を下小次く云べし。あや上よ

見ると説どもをも合職員令。神祇官の雜任。卜部二十  
せて思ひ辨ふべし。義解。長上約在其中と見ゆ。長上を正しくし  
人ぞ何長上と云ひ畧きてを卜長と云ひまゝと龜卜長  
上とも龜長長也。ちて卜部云也。古古物物見見とと也。  
肥前風土記基肆長岡神社の條。纏向日代宮御宇天皇御諡景行天皇坐  
り。自高羅行宮還幸而在酒殿泉之邊於此薦膳之時御具  
甲鎧光明異常仍令占問卜部殖坂奏云此地有神甚願御  
鑑天皇宣實有然者奉納神社可爲永世之財因號永世社  
後人改曰長岡社也何此甲冑を納つる事法曹類林百八十一卷見えとり。  
卜部と云云也。古古聞聞ええととは。古古書書見見ああるる處  
也。但但しし此此職職ちちてて職職員員令令義義解解也。凡凡灼灼龜龜占占吉吉凶凶者。  
氏氏詳詳あららばば

是卜部之執業也と見え。寶龜六年格。勅卜長上。右簡定  
卜部等。中推卜。尤長二人。以任長上。永爲恒例。臨時祭式。小  
凡宮主取卜部堪事者任之。其卜部取三四。卜術優長者。伊  
五人。壹岐五人。對馬十人。○職員令。若取在都之人者。自  
非卜術絕群。不得輒充。おと見えと也。さて宮主口傳抄云  
大嘗會。因郡卜定者。最初之公事也。當家副官。氏人可參陳  
事也云。抑内宮主者。依爲朝家之重職。超越父兄上首勤  
悠紀。大使也。氏長者勤主基。大使第二官人者勤。悠紀。小使  
第三官人者勤。主基。小使也云。大記者朝家之重事。當家  
之大事也。近則文和三年。大祀主基。小使事。前下總守兼繼

宿禰雖相當其仁龜上已中絶之間兼豐猶子兼繁勤仕畢  
也云ことも見也。宮主とト長と一ツと思ふ。臨時祭式  
ト長上季祿馬料月料及ト部御巫等衣服者以神稅充之  
但宮主月糧以宮田給之とほむむ別ありとく考ふべし  
さて宮主と云義いまだと思ひ得る若く稻田宮はて四圍  
主の義うま口傳抄ふ大宮主と云ふも有りト部と云依之。大祓詞。まゝ大嘗會中臣壽詞見えて。此  
等いぞ古苑詞あり。乃多儀式ふ。二季晦日御贖儀。二季と  
と十二月の下ふ。喚中臣稱唯率文部四圍ト部入。宮主在  
せあり。御贖條よも然有り同條ふ。輔更入奏曰。輔と  
の輔あり宮内省申久御贖物進止神祇姓名大和河内乃忌寸。  
四圍乃ト部等率天候止申退出云くと見え延喜宮内省

式ふもかく有て。末文は云く。率天候止申中臣等入行事  
如常儀畢退去。餘月晦日奏進  
御麻儀亦同と見えあるが如し。但し餘  
云くと云ること儀式よを見え矣此を餘月の晦日も  
亦儀との儀此同じき由りてト部の四圍あるを去べて  
率と云るまで不関れる文ふは有儀々らび儀式よ大祓  
儀六月十二月並同但臨時大祓者不令申刀祢數と有る  
をも思合然依を上引ある臨時祭式ふ其ト部取三圍  
ト術優長者云く。若取在都之人者云くと依よ據て彼  
四圍ト部と有るを既くと人皆の疑ふ去やれるを大  
祓詞後釋ふ。これ伊豆壹岐對馬此三圍亦依よ。在都のト  
部を加す。四圍と云る外るべし。と解れおまど如何あ  
らむ。式よ若取在都之人云くと依を既ト部の人れ。

神祇官は官人とありと依ぐ。其裔の亦都下も住るが  
有を。元曆の神祇官年中行事御躰御上此條よ。ト部官人  
氏人等参本官始之。と有り。ト部官人と云。神祇官亦  
る官人。氏人と云。ト部。氏人の官小喚おる依ぐ。三圀のト  
部どもの障あてて。缺ある時あども。ト部の員小充られ  
ある事の有りし。其恒の例あらぬ故。式。其が中を  
正。宮主小爲されむを。輒の良怒事をまむ。殊よ其ト術の  
絶群ある依を。撰ま依ぐ。由あるはし。令集解小引る古記ふ。  
津嶋上縣京ト部八口。下縣京ト部九口。伊岐京ト部七口。  
伊豆ト部二口云。按。ト部の員二十六人あり。員の字  
時も有し。ふや。と有り。此文。津嶋。伊伎の京ト部と有り。依  
今考べのら。更。

は、其圀くと。都下上居れる由ときま也。伊豆の下小  
し。脱とるみやまと所由ありて。伊豆ある  
をむ。常小を京小置れざりし時。も有し。よや。ちて上小引  
る如く。臨時祭式よ。ト部を。伊豆五人。壹岐五人。對馬十人  
と有り。は。職員令ふ。ト部二十人と有り。を。其員合へまむ。  
延喜式も。令此は。依。し。ちて。四圀。ト部と云るま  
を。は。上小云る如く。大嘗會と。大祓儀式と。小のみ聞えて。  
殊更よ。四圀と云るを。大嘗會を云も。更あ。大祓も。上古  
と。殊小重祀儀式あるが故。故。神祇令大祓條よ。ト部為  
解除と有りて。此時をト  
事奉仕る由を見え。祓ど。此よ。四圀ト部を云る事を證  
さむとて。引出と依あり。按。古は。大祓小も。ト部のト事  
をも仕奉りあるが。後よ。革ゆて。解除のみを爲ること。と  
れま。る。あらむ。の。い。ま。と。證。を。む。考。へ。宮。主。祕。事。口。傳。抄。

康安二年卜部宿祢兼豊主の清書小。六月卅日節折の條  
小。大祓詞を記されし。も。四国卜部とありて。後醍醐  
院在位。文保二年六月卅日。任。延喜式江次第。與行被。彼三  
一度之後。又一向如形也。彼記。爲。後覽。記入之。とあり。彼三  
国ある。餘の一国ある。卜部を喚上具て。奉仕らせ給。予  
ぬれ。可し。京ある。が。雜れ。加。予て。四国と云まじき  
殊更。小。四国と云る。恒の例。替りて。其儀式を重く。其  
せら。ゆ。由。よて。あ。云。り。と。聞。也。決。て。由。有。る。事。れ。り。其  
を。彼。三。国。ある。小。今。一。国。は。い。ぢ。ま。ぞ。と。云。小。常。陸。あ。ゆ。卜  
部。ある。は。し。谷川士清の和訓栞。小。卜部の傳。対馬傳。伊  
ども。俱。よ。往。古。と。り。此。秘。術。ある。由。云。予。然。ら。ば。神。祇。官。小。  
ゆ。こ。を。何。小。扱。て。云。る。小。聞。ま。不。し。恒。は。彼。三。国。を。置。れ。て。其。常。陸。ある。殘。置。れ。ざ。ゆ。を。い。う  
小。と。云。小。其。を。鹿。嶋。神。宮。小。奉。仕。り。て。殊。ある。由。ある。の。故

小。恒。を。其。神。宮。小。此。み。仕。奉。ら。し。免。る。朝。廷。了。を。重。き。儀。式  
の。時。小。此。み。召。上。て。奉。仕。ら。せ。給。へ。る。ある。は。し。内。藏。寮。式  
取。祭。條。の。下。小。鹿。島。社。宮。司。祢。宜。各。一。人。物。忌。一。人。云。く。と  
あり。て。卜。部。を。載。ら。れ。ざ。る。を。思。予。也。此。考。立。ダ。と。し。い。か  
が。と。難。む。る。者。も。あり。あ。む。り。件。式。小。載。ら。れ。免。る。を。神。祭  
小。お。き。て。賜。料。此。ある。式。の。限。を。奉。ら。ま。と。る。よ。て。卜。部。を  
其。例。は。を。非。ざ。正。ゆ。加。ら。其。抑。此。国。の。卜。部。は。鹿。嶋。坐。健  
稱。を。載。さ。ま。び。る。ある。べ。し。御。賀。豆。知。命。神。社。小。天。兒。屋。根。命。此。御。裔。此。神。事。仕。奉。れ。る  
が。中。小。後。よ。卜。事。を。持。分。て。奉。仕。る。族。を。卜。部。と。云。て。既。く  
當。国。小。在。し。と。聞。也。然。思。ふ。古。事。の。證。を。ま。抄。常。陸。風。土。記。  
香。嶋。郡。の。下。小。崇。神。天。皇。御。世。小。香。嶋。大。神。此。御。識。の。御。言  
を。大。中。臣。神。聞。勝。命。此。聞。得。て。天。皇。小。奏。免。る。を。始。免。倭。武

命此時不。同神の中臣臣狹山命。御託宣<sup>ツク</sup>何<sup>レ</sup>也。神  
勝命<sup>ヲ</sup>兒屋根命<sup>七世孫</sup>不<sup>テ</sup>臣狹山命<sup>ヲ</sup>其曾孫<sup>アリ</sup>。さ  
て臣狹山命<sup>ノ</sup>父命<sup>此名</sup>を大鹿島命<sup>ト云</sup>も。此地名を負<sup>シ</sup>  
不<sup>ト</sup>聞<sup>カ</sup>也。ま<sup>ト</sup>孝德天皇御世<sup>己酉年</sup>不<sup>大乙</sup>  
仕<sup>奉</sup>られし。此神<sup>不</sup>ま<sup>ト</sup>孝德天皇御世<sup>己酉年</sup>不<sup>大乙</sup>  
上中臣子<sup>大乙</sup>下中臣部<sup>免子</sup>不<sup>云</sup>人等<sup>孝德天皇の己酉年</sup>不<sup>其御世</sup>  
の大化五年<sup>不</sup>大乙上<sup>大乙</sup>下<sup>不</sup>其年<sup>不</sup>定<sup>られ</sup>と<sup>る</sup>位  
階<sup>中</sup>不<sup>今</sup>の階<sup>不</sup>配<sup>不</sup>ら<sup>む</sup>は<sup>八位</sup>不<sup>り</sup>不<sup>や</sup>  
當<sup>る</sup>べき<sup>上</sup>不<sup>中</sup>臣<sup>不</sup>  
此下<sup>不</sup>決<sup>で</sup>字<sup>脱</sup>と<sup>依</sup>べし。下總<sup>不</sup>海<sup>上</sup>郡<sup>不</sup>割<sup>て</sup>香嶋<sup>不</sup>  
大神の神郡<sup>不</sup>置<sup>ぬ</sup>る。は<sup>ト</sup>久慈郡<sup>不</sup>下<sup>不</sup>至<sup>淡海</sup>大津<sup>天</sup>  
朝光宅<sup>天皇</sup>之世<sup>遣</sup>檢<sup>藤原</sup>内<sup>大臣</sup>之封<sup>戸</sup>と<sup>る</sup>を<sup>天智</sup>  
天皇<sup>不</sup>御世<sup>不</sup>して<sup>内</sup>大臣<sup>不</sup>鎌足<sup>公</sup>不<sup>此</sup>世<sup>繼</sup>物語<sup>不</sup>  
不<sup>鎌足</sup>不<sup>常陸</sup>の生<sup>ま</sup>不<sup>して</sup>鹿嶋<sup>不</sup>不<sup>氏</sup>神<sup>あ</sup>不<sup>と云</sup>る

不<sup>由</sup>何<sup>也</sup>。ま<sup>ト</sup>下<sup>学</sup>集<sup>子</sup>も<sup>鎌足</sup>公<sup>常陸</sup>不<sup>鹿島</sup>郡<sup>人</sup>也<sup>と</sup>  
地<sup>不</sup>當<sup>國</sup>の誌<sup>不</sup>見<sup>え</sup>と<sup>る</sup>を<sup>合</sup>せ<sup>考</sup>ふ<sup>れ</sup>不<sup>此</sup>  
公<sup>も</sup>本<sup>不</sup>常<sup>陸</sup>不<sup>坐</sup>せ<sup>り</sup>と<sup>聞</sup>えて<sup>由</sup>何<sup>る</sup>こと<sup>あり</sup>。ち<sup>て</sup>  
常<sup>陸</sup>不<sup>して</sup>天<sup>兒</sup>屋<sup>命</sup>の裔<sup>不</sup>鹿嶋<sup>香</sup>取<sup>の</sup>神<sup>宮</sup>不<sup>奉</sup>仕<sup>不</sup>  
不<sup>は</sup>と<sup>ト</sup>部<sup>と</sup>不<sup>多</sup>不<sup>め</sup>し<sup>趣</sup>の<sup>正</sup>しく<sup>書</sup>不<sup>見</sup>え<sup>と</sup>る<sup>を</sup>  
當<sup>國</sup>風<sup>土</sup>記<sup>香嶋</sup>郡<sup>の</sup>條<sup>不</sup>年<sup>別</sup>四<sup>月</sup>十<sup>日</sup>設<sup>祭</sup>灌<sup>酒</sup>不<sup>氏</sup>  
種<sup>屬</sup>。ト<sup>部</sup>の<sup>事</sup>を<sup>漢</sup>文<sup>不</sup>男<sup>女</sup>集<sup>會</sup>積<sup>日</sup>累<sup>一</sup>夜<sup>樂</sup>飲<sup>歌</sup>舞<sup>其</sup>  
唱<sup>云</sup>安<sup>良</sup>佐<sup>賀</sup>乃<sup>賀</sup>味<sup>能</sup>彌<sup>佐</sup>氣<sup>多</sup>畢<sup>多</sup>義<sup>止</sup>伊<sup>比</sup>祁<sup>婆</sup>賀<sup>不</sup>  
母<sup>與</sup>和<sup>我</sup>惠<sup>比</sup>爾<sup>祁</sup>牟<sup>不</sup>此<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>け<sup>う</sup>の<sup>神</sup>の<sup>御</sup>酒<sup>給</sup>度<sup>神</sup>  
社<sup>周</sup>匝<sup>十</sup>氏<sup>居</sup>地<sup>體</sup>高<sup>故</sup>東<sup>西</sup>臨<sup>海</sup>峯<sup>谷</sup>犬<sup>牙</sup>邑<sup>里</sup>交<sup>錯</sup>と<sup>見</sup>え<sup>不</sup>  
見<sup>え</sup>。此<sup>文</sup>不<sup>神</sup>社<sup>と</sup>何<sup>る</sup>を<sup>香</sup>島<sup>大</sup>神<sup>社</sup>の<sup>こ</sup>と<sup>ふ</sup>て<sup>此</sup>を<sup>其</sup>を<sup>祭</sup>る<sup>由</sup>の<sup>文</sup>あり<sup>ト</sup>氏<sup>居</sup>地<sup>體</sup>云<sup>く</sup>也<sup>云</sup>る<sup>文</sup>の

さま卜部の舎屋此元正天皇紀。靈龜元年此條ふ。常陸圀  
多うりし趣あり。久慈郡占部御蔭。万葉二十ふ。常陸圀茨城郡占部小龍と  
いふ氏人も見と。同次ふ。占部廣方と云人の哥も有り  
防人部田口朝臣大戸ダ進歌とて有り中ふ占部虫麻呂  
と云人の歌も有り。あれも隣き常陸より移る氏人あ  
るべ。聖武天皇紀。天平十八年。常陸圀鹿嶋郡中臣部二十  
烟。占部五烟。賜中臣鹿嶋連之姓。ま光仁天皇紀。宝龜八  
神社。祝正六位上中臣鹿嶋連。大外從五位下。王葉寬喜  
とも見え。持統天皇紀。鹿嶋臣と云見え。王葉寬喜  
元年五月一日此條ふ。二條中納言來申。香取神主問事。當  
時神主本流中臣也。助道者大中臣也。鹿嶋神主餘流也。而  
康治之頃中臣氏無其仁之時。掠申子細。拜任後三代。雖似

相續中臣氏。相交補也。云くと見え。ま東鑑。建久  
島社。祿宜中臣親廣と云も見。とり。さて續紀。天平宝字二  
年九月丁丑。常陸圀鹿嶋神奴二百八十人。使為神戶。姓氏  
錄。撰津圀神別。神奴連。天兒屋命。十一世孫。雷大臣。命之  
後也。と有り。由あることあり。ま公事根源。武雷命。鹿  
島。連。時。風。秀。行。と。云。人。あり。と。有り。都。て。信。ぐ。と。き。説。も  
交。れ。く。と。中。臣。氏。人。の。事。を。云。ふ。由。あり。て。然。云。し。あ。る  
べし。ま。と。東。大。寺。奴。婢。帳。天。平。勝。室。二。年。の。治。部。省。牒。の。文。  
み。下。総。圀。香。取。郡。神。戶。大。槻。郷。戶。主。中。臣。部。眞。敷。と。云。も。見。  
え。と。り。さ。て。大。中。臣。と。い。ひ。中。臣。と。云。中。臣。部。を。云。も。共。み。  
天。兒。屋。命。の。裔。あり。○天智天皇紀。十年三月の処。甲寅  
常陸圀貢。中臣部。若子。長尺六寸。其生年丙辰。至此。歳十六  
年也。と云。光仁天皇紀。寶龜八年七月此下。内大臣藤原  
朝臣良繼病。叙其氏神鹿嶋神。正三位。香取神。正四位上。と  
有り。は。天。兒。屋。根。命。の。御。裔。と。して。鹿。嶋。香。取。神。を。さ。して。



氏神と記されぬ也。上引る世継物語も鎌足も常陸  
の生よし鹿島も氏神ありと云  
ひ。神宮雜例も中臣神社鹿島神宮香取神宮とあり。但  
し。氏神と云ふ二ありておぼしめて其祖神をいへどもま  
と其生土の神おどの類故ありて專と祭る神をも云り  
其た氏寺と云類れり。藤原家より鹿島香取神を氏神と  
云は。其生土の上件引出る書ども見えぬ趣を思  
神ある由れり。ひ合せて香嶋神宮ふ。中臣氏の仕奉れ依る古苑こぞふ  
多。其中臣部の中よ。卜部れ有て。京ふ參上。其事ふ仕奉  
る。其むまをを曉る。香嶋神ふ。中臣氏の仕奉れる事  
の由る。第百廿九段香嶋宮の處  
ま。崇神天皇。卷神聞勝命  
の處よ注を見て知べし。ちて對馬。卜部を。雷大臣命を  
ゆ出と。と聞也。其た此命は。津嶋直祖あるこぞ。姓氏錄  
ふ見えぬれ也。是をり支別。むまをは灼然を。れ不由る

る事ども。城集免て云は。系圖ふ。雷大臣命。足中彦。天皇  
之朝廷。習大兆之道。達龜卜之術。賜姓。卜部令供奉。其事と  
見え。此文の意を。雷大臣命。習大兆之道。亦達龜卜之術。故  
足中彦。天皇之朝廷。賜姓。卜部令供奉。其事と云意あ  
るを。文拙くて紛らわしく聞也。とく心を著て。読辨ふべ  
し。本より家の業。あれむ。大兆の事。小熟。習ひ居られむ。  
事とさるも。此亦漢土。れ龜卜の事を。さへ。小知。ま。と  
り。韓圀。御使。此。不。諸書を引て。云。如く。神功皇后。御世  
著し。然るを。此文。足中彦。天皇之朝廷。不。關。て。云。る。を。彼  
大后の。韓字。征給。へ。る。不。ど。も。あ。不。足。中彦。天皇の。御世。と  
云。し。る。を。あり。但。し。賜。姓。卜部。と。云。る。を。い。か。ふ。お。不。也。  
此。を。賜。ふ。ま。で。も。あ。く。本。と。正。の。職。業。あ。れ。む。あり。ち。て。龜  
卜の。事。を。第。五。十。二。段。鹿。卜。は。處。ふ。委。く。云。へ。正。き。合。せ。考  
ふ。べ。ま。と。度。會。延。經。が。神。名。式。考。證。ふ。對。馬。嶋。下。縣。郡。雷。命。  
神社を。當圀社家神名帳。云。今。豆。酸。郷。ふ。在。て。豆。酸。大明神

と云。今豆酸村にて龜トを為る佐岩氏正月ふ其社ヲ詣  
て此神を祭りト多まゐるあり龜トを雷命と傳ハ  
ま雷命はト部神にて神功皇后ふ從ひ三韓ふ渡也。當國  
阿連村ふ住給り。と云傳へり。と云ひ。對馬の儒者雨森  
東が櫛窓茶話ふ  
も當國のト部の事を相傳神功征韓留ト者十家於此地  
云今僅存二家其人乃吠畝之家既無書籍口く相傳其詳  
不可得而知對馬人藤齊延ぐ龜ト傳ふ。當國ト部  
家説とて在昔神  
功皇后三韓征伐の時雷命皇軍ミイナふ從ひ韓を歸也。當國  
下縣郡佐須郷阿連村ふ留也。龜ト術祭祀法を遺し給へ  
也。其子孫のト部今ト術を傳へる也。其ト部上古八十  
家あり。式ト部對馬十人とありふ符清和天皇紀貞  
規十二年十一月の處ト對馬島下縣人ト部乙屎  
麻呂と云人新羅國へ捕られて行くと其家絶て中古五家  
ゆしぐ逃歸也とること見えたり。

あ也。今僅ふ一家存せ也とあり。上ふ云る雨森氏説ふ  
れむ當時二家あり  
由あり其後ま一家絶とるふや吾友興田吉從云豊前  
宇佐八幡の社人の語れるを彼宮の神主を定むるも  
對馬をりト部を迎へてト定むる例あり其ト部是等れ  
を為る處も常ふ營也おくを語ま也と云へり。  
傳を續紀ふ伊賀都臣神功皇后御世使百濟とあり。依ふ合  
せて思ふふ雷大臣命は韓へ渡也。韓を歸也。對馬嶋  
ふ逗ゆ。其子孫津嶋直姓を稱ゆ。其が中ふト部事を持分て。  
ト部ともあれる事は違有まじく去そ。式ト部下縣郡ふ雷  
命神社ありてま  
と能理刃神社上縣郡ふ太祝詞神社あるを天兒屋根命  
ふ坐て其を祖神といひ殊ふ神事ト事ふおきて祭れる  
ある。けて壹岐ト部は姓氏錄右京  
天神ふ壹伎直天兒屋根命  
九世孫雷大臣之後也とあり。同祖の派ふて。此も雷大

臣命をゆ出さす。其在清和天皇紀。貞觀五年九月廿下。壹岐嶋人石田郡人宮主外從五位下。上部是雄。神祇權少史。正七位上。上部業孝等賜姓伊伎宿禰。其先出雷大臣命也。と見え。同十四年四月廿下。伊伎宿禰是雄卒。是雄者壹岐嶋人也。本姓上部改爲伊伎。始祖忍見足尼命。始自神代供龜卜事。忍見足尼在上。ある津島直の下。引る。顯宗天皇紀。壹伎縣主先祖押見宿禰とある人あり。さて此文。自神代供。龜卜事とあるを誤あり。厥後子孫傳習祖業。備於上部。是雄卜數尤究其要。日者之中可謂獨歩。日者とハ卜事を語あり。史記。其傳あり。備於。嘉祥三年爲東宮宮主。皇太子即位之後轉爲宮主。貞觀五年授外從五位下。十一年敘。

從五位下拜丹波權掾宮主如故。と見え。とす。後の録ども官人。此氏人見えて。宮主とあるも見ぬ。是雄業孝。あどの子孫の。亦も祖業を傳習して。世々京に住て。卜事仕奉れる。れるべし。臨時祭式。上部。在。此を思ふ。都之人とあはれも。か。族の人。字云ある。は。此を思ふ。壹伎卜部。をも。雷大臣命。比裔。壹伎直祖。忍見足尼とゆ出ぬ。とす。中。ふ。是雄業孝等ハ。本祖の氏加婆禰を賜。子。る。ふ。ぞ。有。る。依。壹岐嶋。対馬。小遠。うらぬ。海中の島あり。と。然。有。る。は。ち。て。袖中抄。ふ。加茂縁起を引て。志貴嶋御宇云。勅。卜部伊吉。若日子。令。卜。と云。お。とも。見え。ぬ。と。す。嶋と。欽。明天皇の宮敷。坐。る。地。の。名。あり。ま。と。万葉十五。ふ。雪連宅満。新羅へ使。さ。は。し。時。壹岐嶋。ふ。到。て。身。失。る。を。挽。む。長歌。ふ。和。多。

都美能。可之故伎美知乎云々。由吉能安未能保都手乃宇  
良淑乎可多夜伎弓由加武止須流爾云々。壹岐を古、尤由吉とも云り。  
此雪達も。壹岐直と同氏人よて。壹岐嶋人ある。都をゆ  
新羅子遣さゆ。海路小便ある。已が産土此嶋子立よ  
ゑる間。病よ遭へる。れらむと思はる。同度の別  
依長歌よ。大和因ふして。家人の待居らむ由を詠とれ  
彼嶋小住ゑる時のおとふを非也。但し彼嶋小由緒ある氏人、や有らし。  
ちて反歌よ。伊波多野よ宿、ゆる君云々。とほきは石田小  
し天。身失と依趣あす。さて其処ある山小葬る状も。石田は、上引る清和天皇紀よ依よ。是雄業孝等が出

る郷あす。宅満が上をト子とるも其処あす。ちて伊豆、下部  
を。彼因ふ遷祭られし時よ。別ゆゑる。ぼく所思とす。其を  
伊豆三嶋神社の本社を。式に攝津、因嶋下郡。三嶋鴨神社  
とある社よて。此を鴨積羽八重事代主神よ坐を。同郡よ  
天石門別神社。須久く、神社並坐て。須久く、神社は。兒屋根  
命あるべく。かく並坐ひあとを。石門別命は。兒屋命ニハカタ外  
祖父よ坐まひ縁よとる事ある。ぼき由を。上津島直よ云  
る如く。依を。八重事代主神も。まを石門別命。此御塔よ  
坐す。其を上王主命の御名を解る処よ云る如く。石門別命よ御女ニ

柱坐て。一柱を許登能麻智比賣命、あを己く登魂命、此後  
神ふて。兒屋根命の御母あり。一柱を天津羽々命。亦阿波  
も阿波命とも阿波咩神とぬ申は。あを八重事代主神の後神ふ坐る也。其  
は伊豆三嶋神社の坐立賀茂郡ふ。阿波命神社坐まはるを。  
文徳天皇紀ふに。伊豆国阿波咩命と阿。仁明天皇紀。承和七年の處。  
此神此御託言ふ。三嶋大社本后と宣へり。三嶋大社と云  
社のことあり。さて摂津国三嶋鴨神社を。事代主神坐  
あをまよ此神を伊豆国よ遷して其やがて伊豆三嶋神  
社よ坐はることまよ阿波咩命の委き由を。第百三  
十一段ふ注べし。此ふを唯あらましを云のみぞ。然まを  
八重事代主神を。兒屋根命此御從母此夫ふあも坐はる  
ける。此因縁ふとて。三嶋鴨神社を伊豆国よ遷はり時ふ。

須久く、神社ふ仕奉てし津嶋卜部の別て附添往らる  
あらむ。三嶋鴨神社を伊豆国よ遷はる時代のことも。  
考へたる事の有て。此も第百三十一段よ云ふ  
可はて當國の卜部氏人此御紀ふ見多るを。まは文徳天  
皇紀ふ。齊衡二年正月戊子。加卜部雄貞外從五位下。同三  
年九月庚戌。宮主外從五位下卜部雄貞神祇少祐正六位  
上卜部業基等賜姓占部宿禰。此を當時まで卜部と書て  
宿禰の加婆祿を天安元年正月丙午。正六位上占部宿禰  
賜へる由あり。麻呂一本とあり。同二年三月己巳。外  
業基授外從五位下。印本基字の旁よ。從五位下卜部宿禰業基爲神祇權大祐。四月辛丑是日。宮  
主外從五位下。占部宿禰雄貞卒。雄貞者龜策之倫也。兄弟

尤長此術兄弟とて業基と二人を帝在東宮時爲宮主踐  
詐之日爲大宮主宮主口傳抄云先立坊日被補宮主踐詐  
しまさ凡御讓位之日仰宮主事代被召仰之例也とも  
ありはて東宮の宮主を坊宮主と稱ふ同書み見  
えと 齊衡二年正月敘外從五位下上み引る雄貞本姓卜  
部齊衡三年改姓占部宿禰此も上み引る文み合り但し  
年改占部賜宿禰性嗜飲酒遂沉湎卒時年卅八印本み卅  
戸といふ義あり誤あり今を古寫七月丙子是日神祇權大祐外從五位下  
本二本み依まむ其を傍註を本文み爲とるよて  
占部宿禰業基兼爲宮主業基を印本み平麻呂と作れど  
誤あり今を古寫本三本み拠れりと見え清和天皇紀み  
さて今の校正本みを業基とあり  
貞觀八年二月十三日外從五位下神祇權大祐卜部宿禰

眞雄爲參河權介眞雄やぐて業基あり其由下み云を見  
部と作り其を是よ前み占部と改ら同十年正月七日  
れとるを復卜部を改られとりや見也  
外從五位下行參河權介卜部宿禰眞雄授從五位下と見  
え陽成天皇紀み元慶五年十二月五日尾張因中嶋郡從  
五位下行丹波介卜部宿禰平麻呂卒平麻呂やぐて眞雄  
あり其をし下み云  
平麻呂者伊豆因人也幼而習龜卜之道爲神祇官之卜部  
揚火灼龜決義疑多効承和之初遣使聘唐承和三年七月  
小野朝臣篁を唐み遣さ 平麻呂以善卜術備於使部使還  
れし時の事あり信友云平麻呂  
之後爲神祇大史術此尤とるみ依て遣唐使の從部と  
して備られとるあり其を遠因へ遣はし給ふ御使みし  
る殊み神の冥助を乞ふるみ例ありれば必卜部をも

屬られとるおほべし。して使部七職員令。神祇官の雜嘉  
任。卜部二十人とある。次は使部三十人とある。是あり。嘉  
祥三年轉少祐。齊衡四年授外從五位下。天安元年正月正  
六位上占部宿祿業基授。外從五位下。天安二年三月外從  
へ。其を齊衡四年やがて天安元年あり。天安二  
年拜權大祐兼爲宮主。五位下占部宿祿業基兼爲宮主と  
ある。ふ。貞觀八年遷參河權介。十年授從五位下。此も上り  
符也。貞觀八年二月外從五位下神祇權大祐卜部宿祿業基  
爲參河權介。十年正月卜部眞雄授從五位下。とある。ふ  
符也。累歷備後丹波介。卒年七十五。御紀も參河介も爲さ  
る。備後介丹波介も爲さる。見多るを合せて考ふる。ふ。平麻呂  
も。し。事。を。漏。され。と。り。也。見。多。る。を。合。せ。て。考。る。ふ。平。麻。呂。  
占部雄貞と兄弟ふ。共ふもと伊豆圀此卜部氏人あり。始  
雄貞を伊豆圀人と云事を見えざれども平麻呂を伊始  
豆圀人とあれむ。雄貞も當圀の人あること知べし。

卜部業基といひし時。占部宿祿姓を賜はす。其後名を眞  
雄と改免。後ふ平麻呂と改免。貞觀十四年の太政官符。ふ  
宿祿平麻呂とあり。此占字をばと卜部と復し改免られ  
頃たりや改られむ。此占字をばと卜部と復し改免られ  
る。此事御紀。然るを紀ふ。其時々此名をもて記さ  
る。と。依。が。故。了。別。人。の。如。く。聞。え。て。紛。ら。は。し。く。聞。ゆ。れ。ど  
め。右。此。如。く。徴。し。考。ふ。ると。死。を。同。人。ある。と。更。ふ。疑。あ  
く。雄貞と腹自ふて。平麻呂は兄あり事も。天安二年。雄  
貞の卒れる下の傳。雄貞者龜策之倫也。兄弟尤長。此術  
云く。卒時年卅八と見え。平麻呂の卒れるは。元慶五年ふ  
て。卒年七十五とある。雄貞よ正齡四長を依りて灼し。

然るに彼二人姓を賜ると記。雄貞と正官位の劣れる事は。按ふに伊豆国より出て仕奉れる事此雄貞と正を後れとゆへむ。故ふもや有らむ。何まよも平麻呂雄貞は兄弟なるべし。はと平麻呂此傳ふ。平麻呂者伊豆国人也。とあれど雄貞も伊豆国人もて素とめ其國の卜部此氏人なほあらず。其父祖父あどを知はらるるは。疑なきも分派とる卜部ふて。雷大臣命此裔あるまは。疑なきも此あ正。然依を國史に伊豆国人也とあるのみを取て決まあまど其を一偏れ説ありまよ世に何係國書どもも平麻呂を中臣意美麻呂子大中臣清麻呂子諸貞子智治麻呂の第三男正棟の子ある由に記せるが有れど紀子伊豆国人也とあるよ合む。殊ふ正棟と云なる人な

中臣系國子依て考ふるに。從六位上内舍人あ正し。後正出家して法名を壹演といひ貞觀七年九月三日權僧滅謚曰慈濟六十五とあり。然れど延曆二十二年の生あ正平麻呂を此人の子を為ると記す。五歳の時此子とあるものやまよ平麻呂を直ふ智治麻呂此子と為ると云をれど中臣系國子智治麻呂の子五人あれど平麻呂と云をれど。殊ふ智治麻呂此子あらむ。此紀に伊豆國人也と記さるべし。實に符をざる事多し。熟く辨ふは系國の多し。彼家傳らるる眞の系國を。かふら世ふきも此あり。彼家傳らるる眞の系國を。かふら世ふある系國のごと。安ふた非じとぞ思ふ。さて伊豆誌に田方郡よ吉田村を云有て平麻呂此出所ありと云傳ふと云り。まよ同書に工藤祐經が家人鹿島竹五と云者の姨母伊豆の吉田と云處に在ると云へり。但し此を古書を引正と見ゆ。何あらむ。まよ文化八年に八丈島人服部義高を云が著せるもの。彼島に卜部と稱するもの有て。神事ふ預める由を記せり。此を猶と尋ぬべし。扱貞觀十四年の太政官符に平野神社。預從五位下卜部宿祢平麻呂とあり。然まよ今の平野家。平麻呂の正統を正し。其



右伯家記神祇官年中行事朝野群載云云謀計記辨  
ト抄付録ニヤ先ぐ正吉田勘文名法要集十四卷系図二  
十卷系図あどを ちて雄貞此後也早く絶絶と見えて聞  
見て徴去はし ちて雄貞此後也早く絶絶と見えて聞  
えざむを平麻呂此後也中頃までも三四家ばり正有  
しと聞えて康安二年ふト部宿禰兼豊の記せる宮主口  
傳抄云物今の吉田家此外ふ多く同姓此人名見え  
ふ正。それこ兼字を名ふ負ふを思ふ平麻呂の末此  
ぬることと平麻呂の子豊宗の子好眞の子兼延と云し  
人より代々負ていへる通字とあまゆかくて口傳抄  
ふ兼雄兼繼兼文兼前兼淳兼頭兼尚兼固兼盛兼濟兼經  
兼憲兼賴兼頭兼佐兼世兼方兼澄兼貫ふと見とる吉  
田の代系ふおくまよ差笏先く有達失云く文保度主基  
小使兼彦宿禰先指笏之処不差得之適差出之処落畢其  
時子息兼負寄取云くまよ宮主代兼高宿禰宮主兼貫幼  
少之間所相語也まよ兼負兼前等宿禰故障之時兼豊相

替宮主令參行云くまよ大祀違乱周章之間兼豊于時勤  
宮主代並主基大使相談兼彦兼負等宿禰云くまよ募例  
事役兼前宿禰申沙汰之間云く以他縁令掠申令超越兼  
繁畢以血如洗血兼豊為猶子之間歎申入後日賜同日位  
階畢あど何るを思合せて同派の多在しさまを知べし  
此中ふ兼方と云ふも同書ふ兼方宿禰記と云字引とる  
よ弘安永仁正安の頃此事見とるを思ふふ日本紀の  
撰者あるべく所思也此人の名紀ふ始ふト部宿禰  
懐賢とあまど本文よ何処も兼方と此み有正因よ云  
釈紀の奥書よ大常卿ト部朝臣兼永をゆるむ正安三年  
と云るを思ふ兼方の子あどふや然るよ加婆泥を朝  
臣や署るは後人此所為あり其由下よ云思ひ合せて  
悟るかくて兼豊は平麻呂十六世孫ふて今此吉田ト部  
此祖あまども當時氏上あ正しとは見え也其口傳抄  
者依朝家之重職超越父兄上首勤悠紀大使氏上者勤  
主基大使也云く近則文和三年大祀下総守兼繼宿禰雖  
相當其仁龜ト巳中絶之間兼豊猶子兼繁勤仕畢といへ  
る状まよ上引る文等をもく見通して思ひ辨はし

志加まむ外の家くは漸く衰オホ子て。今の吉田家のみ盛、  
ふ成れレし故ふ。これ於レのら。平麻呂ハ正統マシチに如くあり  
來ふレむ。カクる事ハ古ハも今ハちて此氏ハ加婆泥ハ御  
紀ハ宿禰ヲと見えて。上ハ引る如くお依ハを古書ども此  
奥書ハ。此氏人の名ハ多く見えぬ依ハ。唯タト部某ハ書  
依ハ多かる中ハト部朝臣某ハと書るも何ハ就キて朝臣  
を賜へるあらむと所思オホもまど。其事古書ハ見えぬ。故考  
ふ依ハ。此ハ平麻呂十九世孫兼俱ハと記し此事ハありむ有レ  
依ハ。其ハ宮主口傳抄ハ探者ト部兼豊ハと云ハ平麻呂十六  
世孫ありぐ。其書ハ代ハの祖ハ此名ハ同氏人の名ハをも多

く舉ハと依ハ。何ハもト部宿禰某ハと記し。自ハ此名ハをもト部  
宿禰と奥書ハ書レはと此書ハ兼豊の曾孫兼富の書加  
とる文ハ二所ハ有レて。一所ハ規應元年六月の文ハ一宮主正  
六位上ト部宿禰兼富と記せレ。然ハるハ同書御體御ト部  
奏書書様の處ハ。年號月日ハ下ハ。宮主位官ト部宿禰某。  
宿禰を一本ト朝臣とあるハ下ハある兼致の書入ハをり  
て後人ハ替ハとるあり。其ハ此書ハを記せレる兼豊ハ宿禰の  
尸ハあり故ハ宿禰と書て後ハ子孫の徒ハもあハ書ハベ  
き由ハを兼ハと依書ハ。尸ハを達へて書ハべき由ハあらぬや。中臣  
位官大中臣朝臣某ハと署カクべき由ハを記しおハ依處ハ兼俱  
の子兼致と云ハ人ハ此書加ハとる文あり。其文ハ。此年號月  
日下當家ハ嫡父子書ハ之宮主並中臣之輩ハ不載ハ之去明應

元年十二月、奏書。家君竝予位署載之。予嚴訓如此。件位署  
如此書之年號、月日、從五位上行權大副兼侍從。卜部朝臣  
兼致長上從二位行權大副兼侍從。卜部朝臣兼俱と記せ  
也。此位署の權大副の上、神祇てふこと無てを通え  
家君と兼俱。かくまむ卜部氏の尸を朝臣と稱ふは、  
兼俱の始とする事あること灼し。熟く文義の心を  
古格を改むる事、凡そ朝臣の加婆泥を賜ひての事  
あらむ。必其事を記さるべき。家君嚴訓と此み云  
て、其事を言さぬ。私あ抑加婆泥を改むる事は、姓の尊  
卑おかくる御政事、此本ある故。詔命れらてを得爲ま  
じき御定、あゆみ。彼人の私も此せられしは、謂ある事

小也。故吉田卜部の人の兼俱、御たり前ある人。朝臣の  
抄の奥書、兼致と云人を、卜部朝臣とある。後人の  
にざあり。其此人は、上も奉る兼富の先代あるも、此  
をいりて朝臣と稱べき。此人朝臣を賜たりとら  
む。お、其子兼富の宿祿と署べき由あらぬや。其はと  
はむ。古を四圍に卜部のいをも多在しを、漸くお絶て。伊豆  
卜部の一派ある。此家此み残して。今お神祇官に任され  
て。神事此宗源とほゆ。卜部を職とせられ。龜卜長上、ま  
宮をも兼らゆ。事は、いをも貴死事おこそ。職員令お  
卜部二十人とある。下お長上約、在其中と見え。室龜六年  
五月十九日、格お簡定。卜部等、中推、卜尤長、二人、以任長上  
永為恒例也。と見ゆ。然るを俗に神道者おぞ云徒の彼家  
を神道長上といひ。神祇長上おども云。卜部長上と云  
字思ひ謬れるあるべし。神祇長上と云こと、正しき古書  
小見さまどぬ。もし申さば、神祇伯お任さる。御家をこ

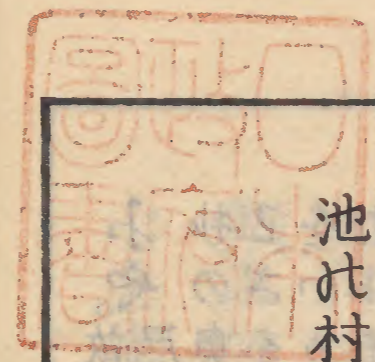
そ申<sub>ま</sub>ば<sub>い</sub>ま<sub>何</sub>事<sub>も</sub>正<sub>し</sub>き<sub>故</sub>実<sub>を</sub>あらぬ<sub>下</sub>さま<sub>の</sub>説  
こそいと慨<sub>と</sub>けれ<sub>此</sub>誣<sub>言</sub>の<sub>彼</sub>卜部<sub>家</sub>お聞<sub>え</sub>とらほし  
うば然<sub>こ</sub>そ心<sub>苦</sub>く思<sub>は</sub>る<sub>べ</sub>し<sub>我</sub>人<sub>去</sub>ら<sub>も</sub>眞<sub>の</sub>道<sub>を</sub>と  
ぞ<sub>ら</sub>む<sub>と</sub>為<sub>さ</sub>る<sub>た</sub>う<sub>あ</sub>ら<sub>ば</sub>名<sub>を</sub>正<sub>く</sub>せ<sub>む</sub>と<sub>云</sub>ふ<sub>も</sub>此  
を<sub>況</sub>て<sub>彼</sub>徒<sub>も</sub>神<sub>道</sub>を<sub>正</sub>しく<sub>直</sub>き<sub>字</sub>本<sub>と</sub>  
は<sub>あ</sub>ど<sub>云</sub>ふ<sub>常</sub>の<sub>を</sub>し<sub>予</sub>語<sub>あ</sub>ら<sub>ま</sub>や<sub>も</sub>

○門八カシ檀チ口コ光ミツ信シン前マエ澤サハ万マン重ジュウ等トウいふ<sub>此</sub>の<sub>十三</sub>此<sub>卷</sub>を<sub>花</sub>細ハナホソ

櫻形木と形あらせて。同じほあびた友かき小筆のい  
おきいあおせじと勤免と泳を眞篤ミスベ川る信濃シノノけ国誼

訪の海よ下流ま出る。天に中川や下りて。伊那郡の野

池に村小代り村をり免ける。大平久備。



吉田 大平 久備 伊那 郡 野 池 村 小 代 り 村 を り 免 け る 大 平 久 備 伊 那 郡 野



